

震災手記 『ふくしまの風景』

— 原発事故から見えてくるもの —

登 嶋 巖 信

はじめに

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災。この地震は巨大津波を引き起こし、東日本の沿岸部に甚大な被害を与えた。そしてまた、福島第一原子力発電所（以下I・Fと記す）では、原子炉が冷却不能になり次々と爆発するという世界を脅かす大事故が発生したのである。

この国難と呼ばれるほどの災害に、福島は地震・津波・原発事故という三重苦を嘗めた。FUKUSHIMAの名は世界中に知れ渡った。チェルノブイリと同様、それは決して良いイメージではない（現に、外国人に私達が福島県人であることを明かせば、非常に同情される）。

今回、智山伝法院の方々から、福島県民としてこの震災の体験を記録として残すことを勧められた。それが後年、当時の様子を知る貴重な資料になるというのである。もとより、私はその任にありスキルもあるとは思わな

いが、未曾有のこの災害を読者が再確認すること、原発事故が福島や私の周辺に何をもたらしたかをご理解いただくことは有意義に思う。そしてそれがメンタルに与えた影響も心理学などの面で何かの資料になるかもしれない。そう思って筆を取った次第である。また、事故後原発について調べれば調べるほど驚くべきことが明らかになってきた。この稿の後半に、それらの氾濫する情報から自分の体験を踏まえて真実だと思えるものがある程度盛り込んだ。読者の原発や放射性物質等の理解の一助になればと思う。

私は、経済性よりも生命を重視する立場から今後とも脱原発を主張し続けるが、その理由をこの手記から少しでも感じていただくことを強く望む。それは、野田首相の宣言の通り、事故は収束したかのように思われて風化しつつあることや、政府の対応に危機感を抱くとともに、この大事故から見えてくるある重大な問題を認識していただきたいからである。

人によっては現在の非常に深刻な状況を理解されておらず、未だに原発や日本は安全だと思っているかもしれない。しかし、残念ながら1Fはとりあえず冷却ができていただけで未だに危険な状態であり、事故は何も収束していない。そして、放射能汚染による健康被害は既に福島をはじめ遠く関西でも起こっているし、これからさらに重篤な被害が現れると思われる。放射性物質は目に見えないが、確実に生命を蝕んで行く。そして遺伝的に影響を与える。ただし、その健康被害は被曝が原因かどうかは決して証明できない。ここにその本当の怖さがあるのだ。

さらに、杜撰な安全管理を棚に上げ、大津波による大事故を警告されていたにもかかわらず東電により「津波による想定外」と言われたこの事故だが、地震で震度が6あった場所の全ての原発は破壊されている。原状回復まで1年以上かかるといわれ、運転不能になっているのだ。青森の東通、宮城の女川、福島第一（1F）、福島第

二（以下2Fと記す）、茨城の東海第二がそれである。爆発した1Fも電源喪失は地震による。2Fも建屋は壊れなかったが、中で水素爆発が起こっていた可能性が高い。東海第二も非常用ディーゼル発電機の一部が故障し、もし電源が回復するのが遅れていれば爆発していたと言われている。女川はまだ放射性物質が漏れているという情報があるくらいまったく回復していない。そのうえ余震により、原発の何十倍以上の放射能がある六ヶ所村の再処理工場まで外部電源喪失という、一歩間違えれば日本壊滅どころか世界中の生命に影響を与えかねないところまで一時期達してしまった。つまり、津波だけではなく地震で原発は壊れるのである。また、静岡の浜岡原発にいたっては、菅首相が停止させたが、いざ止めてみたら既に壊れていたことが明らかになった。5号機の復水器に400トンの海水が流入し、そのうち5トンは圧力容器内（原子炉本体）に流入していたのだ。5号機は2005年に運転を開始した国産最新型原子炉で、「東海地震が来ても大丈夫」と言い張っていたが、地震がなくとも簡単に配管破断が起き、海水が炉心に入り込んでしまったのだ。同じように12月には玄海原発3号機でも放射性物質を含む一次冷却水1.8トンが漏れていたが、九州電力は公表しなかった。これだけでも、今の日本の現状がいかに危険な状況か理解できよう。

そして、この事故を通して見えてきた、その背後に潜むある重大な問題とは…。

ここで一つ断っておかなくてはならないことは、手記を書くということとは、当然のことながら書き手として全く主観的になるわけで、その中には自らの感情や思考・視点が多分に含まれることになる。同じ体験をしても感じ方や捉え方には個人差がある。情報が操作され氾濫していることもあり、私を感じ、思ったこととは逆の反応をした方もあるだろう。確実に温度差があると思う。読者にはそのことに十分留意していただき、どうか是非の判断無きようお願いしたい。また、手記ゆえに敢えて註を設けず、情報源や資料を示さなかった。個人的なご質

問やご意見は、いつでもお受けする所存である。

それでは、震災以降の私の手記として、原発事故が私やその周辺、そして福島にどのような影響をもたらしたかを中心に記していきたい。後年、この手記が当時の状況を知る資料として、何らかの役に立つことがあれば幸いである。

3月11日 運命の雷

私は福島県いわき市に住んでいる。仕事でよく地元を離れるが、震災当日はいわきに居た。いわきは昔から自然災害が少ないと言われ、東北でも雪はほとんど降らない。沖合は暖流と寒流が交わっており、その影響で冬温暖で夏涼しいという過ごしやすい気候で、漁場にも恵まれた土地である。年間の平均気温も14度ぐらいで調度よいし、冬の日照時間も日本一長い。愛すべき山や海があり、その自然環境を私はとても気に入っていた。

3月11日、その日の朝は穏やかな良い天気だった。登拝修行に通っている二ツ箭山へ行くかどうか迷ったが、何となく気が乗らず、止めにした。パートに出る妻を街へ送って行くことにし、その帰りに海岸線に出て海を眺めた。自坊は海から約1kmぐらい離れており、その沿岸には防風林が南北10kmに渡り植えてある。その海岸線をドライブすることは私の楽しみの一つであった。海は波もなく、のどかな風景が広がっていた。まさか数時間後にその様子が一変するとは、夢にも思わなかった。

家に戻り、読書をしようとするが、何故か急に障子の破れが気になりはじめ、普段は自分では滅多にしないのだが数時間かけて家中の障子の穴を塞いでまわった。今考えればこれは虫の知らせのようなものだったのかもし

れない。後日、このことが役に立つことになる。

午後になり、空は曇り始め、風が出てきた。妻を迎えに街へ出て、帰りに妻が買い物をするというので、その間、近くの公民館で待つことにした。午後2時46分、地震が発生した。はじめは震度3ぐらいの揺れだったと思う。なかなか揺れが収まらず、段々に大きくなっていったので、危険を感じて外へ出た。立って居られないぐらいの横揺れであった。ちょうど杉花粉の時期であり、「今年は花粉の量が非常に多い」などと言われていたが、公園の木々が大きく揺さぶられ花粉が黄色い煙となって霧のように漂っていた。目の前の建物は細かく、速く、ガタガタと激しい音を立てて振動していた。揺れは5分間ぐらい続いただろうか。そしてちょうど揺れが止んだその瞬間、雷鳴が大きく一発、轟いたのだった。今思えば、あの時の雷が、本当に日本にとつての運命の雷だったように思う。日本も、福島や私の周辺も、もうそれ以前の状態に戻ることはできないのだ。

「天変地異だ！」周囲の人たちはそう叫び、慌てて車に乗り込んで自宅の様子を見に帰って行くようだった。携帯電話は既に繋がらなくなっていた。「震源地はどこだろうか？他だとすればかなり被害が大きい筈だ」と心配しながら妻と合流し、急いで自坊に戻った。いわき市の震度は6弱であったが、自坊は地盤が弱かったのか、特に本堂の被害が大きかった。墓石や灯籠などもかなり倒れていた。父の話では鐘楼堂の鐘が真横になるほど揺れていたそうだ。庫裡内もメチャクチャだったが、両親に怪我はなく、学校や保育園に行っていた子供たちも無事だと聞いて一先ずホッとした。

その後、風の強さが増して大風になり、雹や雪が降った。それは調度、沿岸に大津波が押し寄せていた時間帯だった。近所の人たちの多くは小学校に避難し、大津波警報により逃げてきた人たちもいた。近くの川が津波によって逆流して増水し、土手からあふれて民家が浸水しているという。その話を聞き早速見に行くが、水は引い

た後で川も普通に戻っていた。自坊から200mのところまでできていたようで、その跡は異臭を放っていた。夕方方には天気も落ち着き、不気味な静けさが漂っていた。私が沿岸でこの津波の被害を実際に目にしたのは翌日のことである。

インフラは、電気は通っていた。水道は断水していたが、自坊には井戸水があったので水の心配はなかった。ガスはプロパンなので当面の火の心配はないが、先のことを考えると無駄遣いはできない。数ヶ月前に大掃除で私が捨てようとした電気湯沸かし器を、父が大反対したためにとっておいた。一度も使ったことが無かったが、こんなときに役に立つとは思ってもよらなかった。

家族は大きな余震の続く中で庫裡内の片付けに追われた。キッチンが食器棚が倒れ、グラスや皿などが割れて足の踏み場もなく、人が入れるようになるまで数時間掛かった。夜になり、宮城県の名取での津波の映像をテレビで見た。「とんでもないことが起こっている！」この時、やっと歴史的な大天災が起こったのだと認識した。電話は掛かりにくかったが、知人友人からお見舞いの連絡やメールを多く受けた。その応対や家の片付けが夜中まで続き、大きな余震の続くなか床に就いたが、度々その揺れで目を覚ましたのだった。

3月12～14日 明らかになる被害状況、街の混乱

12日、市内の被災状況の確認、連絡の取れない親戚や有縁の寺院の様子を見に車で廻った。まず海岸線を見に行ったのだが、道路には海の砂や海水が上がり、寸断され、アスファルトはグニャグニャになっていてほとんど通行不能状態であった。防風林の松林に車が何台もひっくり返って突っ込んでいた。松林の中に病院が一棟建っているが、一階はマイクバス等が突っ込み、窓も全て割れて中はメチャクチャになっていた。「うちの近くでも

こんなに被害があったのか」と驚いたが、実はそれは沿岸部では軽い方だったことが後になってわかる。自坊の近辺はこの防風林によって助けられたのだった。先に述べた南北約十キロに渡るその海岸線は、防風林とテトラポットによって波の被害をある程度押さえることができた。普段は目障りなテトラにも、この時ばかりは感謝をした。岩手や宮城では、逆にこの防風林が仇となったと聞く。木が波の強大な威力により根こそぎ倒され、それが家屋を破壊していったという。もし、福島県沖で同規模の地震と津波が起こっていたら、自坊は跡形も無くなっていただろう。増して、原発の被害も想像を超えたものとなっていただろう。

市内の状況は、あちこちで建物が壊れていたが、瓦や塀が崩れているのがよく目立った。直下型ではなく横揺れ的な地震だったので、地盤が緩いところでは揺れによる被害は甚大ではなかったようだ。しかし、地割れしているところも多く、道路は通行止めのところがあった。市内の水道管もかなりやられたらしい。断水により給水車が避難所を中心に出ていたが、皆何時間も並んでやっと少しの水を貰える状態だった。4、5時間並んで貰えなかった人もいる。こんな時こそその助け合いで、道路には「水あります」などの看板を出して井戸水を分けている家もあった。自坊でも井戸水を開放し、来る人全てに自由に水を持って行ってもらい、トイレも水が流れたので自由に使用してもらった。ガソリンスタンドは渋滞し、街中では火事も起こっていた。市内の店はほとんど閉まっていた。たまにコンビニが開いていても食料品や水は売り切れ、自動販売機でも水やお茶がどこへ行っても売り切れで、缶コーヒーぐらいしか残っていなかった。

親戚や知人の無事を確認して一安心した。地震による自坊の被害は大きい方だということがわかり、帰宅して本堂と庫裡の片付けに専念した。だが、この時点ではまだ本堂の市内の被害状況を認識してはいなかった。夕方になり、いろいろな情報が耳に飛び込んできたのだ。「久之浜地区は津波とその後の火事で大変な事態になってい

る。薄磯・豊間地区は津波で壊滅的な被害である」など、その話に正直ビックリした。薄磯は自坊から2〜3 kmしか離れていない海水浴場がある集落で、父の成田山勸学院時代からの同級生で友人の猪狩栄隆僧正の御自坊修徳院がある。灯台がある塩屋岬を挟んで北側が薄磯、南側が豊間と呼ばれている。そこを見に行ってきた父が非常に深刻な表情で戻ってきた。集落は瓦礫の山となり寺院も甚大な被害、猪狩僧正はかろうじて助かったが、意識不明で入院しているという。自坊の被害状況に落胆していた父だが、薄磯を見て帰ってきてからは「うちはまだ軽い方だ」と重い口調で語った。

そして、1Fの事故もこの夜からニュースで知ることになる。1号機が爆発して半径20 kmの範囲まで、そして2Fも半径10 kmまで避難指示が出ているという。自坊から1Fまでは約40 kmぐらいだ。しかし、この時は私自身、原発や放射性物質のことについて詳しくなく、あまり気に留めなかった。ゆつくりニュースを見る時間もなく、その日も夜中まで片付けに追われたのだった。

翌13日、親友のM君が水を貰いにやってきた。また、他の友人に湯本地区まで水を届けたいという。断水により、皆困っていた。私はポリタンクを貸してやり、一緒について行くことにした。湯本・小名浜・豊間・薄磯地区の被災状況を見るためである。

街の様子は、ガソリンスタンドは相変わらず車が並んでいた。また、スーパーも時間を限って営業していたが、駐車場もいっぱい、レジも長蛇の列をなしていた。食品も少なく、すぐに売り切れる。パン屋（水が無いいためほとんどが閉まっていたが）のパンも買い占めている人がいて皆には回らない。

湯本・小名浜と巡り、被害状況は様々であった。全く被害のない寺院もあったが、全壊に近いところもあるとの情報も得た。そして小名浜・江名地区の沿岸に出た。車や船がいろいろなところに突っ込み、家屋は破壊され、

道路には砂があたり橋がグチャグチャに壊れているところもある。津波のエネルギーはこれ程のものかと驚き、そのまま豊間・薄磯に入ろうと沿岸を北上したが、豊間の手前の二見ヶ浦付近で通行止めになっていた。「この地区は余程被害が大きいのか？」私はどうしてもそれをこの目で確かめたく思い、嫌がる友人を宥め、大きく迂回して薄磯の北側から入って見に行くことにした。途中、通り慣れた道は陥没していたが、かろうじて進入できた。薄磯地区は立ち入り禁止になっていたが事情を話して入れてもらった。一山超えて段々と集落に近づくにつれ、その異様な光景が私を圧倒した。「何だ、これは……」修徳院のすぐ裏に出たが、その現実離れた光景に愕然として言葉が出ない。薄磯は塩屋崎灯台の眼下にあり、美しい遠浅の海岸を持ち、風光明媚、夏には多くの海水浴客で賑わう豊かな集落だ。私も子供の頃にはよく自転車で泳ぎにきて遊んでいた。あの見慣れた景色が……、瓦礫の山、山、山だ！津波は修徳院の裏山まで押し寄せていた。境内は瓦礫の山で埋め尽くされ、かろうじて本堂・客殿は崩れずに立っていたが、中は浸水し、被害は甚大である。また寺院前には家が密集して立っていたが、ほとんどが瓦礫と化し、足の踏み入る隙もない。集落はほぼ壊滅していた。

猪狩僧正のご子息兄弟が居られ、片付けの作業をしていた。何と言葉を掛けてよいのか、本当にわからなかった。副住職の話では、津波の来る時間が早かったこと、まだ瓦礫の下には100人以上埋まっているだろうということ、遺体が上がってくる度に般若心経を読経していること、生き残った人たちが家族や自分達の物が少しでも残っていないかと探しにきていること、プロパンからガスが漏れて漂っていて火気厳禁でいつ火事になってもおかしくないということであった。確かにガス臭い。そして生気を失った人が何かを探して瓦礫の中をさまよい歩いている。未だ津波の心配があり、大きな余震の続く中を……。友人はその凄惨な光景に耐えられなくなった。「帰ろう」という言葉に私は頷き、そして「これを決して忘れてはいけない。後世に生の言葉として伝えなければ

ば」と心に強く思い、薄磯地区を後にした。

自坊へ戻り、本堂の片付けを続けた。堂内は何もかもがメチャクチャだった。壁はほとんど崩れ、ガラスは割れ、梁も一本落ちていた。檀信徒の位牌も落ちて壊れてしまった。もう捨てるしか無いだろう。とにかく、春彼岸が近い。彼岸前から一週間程東京で仕事が入っている。それまでに何とか片付けねば。私事ではあるが、自坊からは給料を貰わず、御助法や寺院のお手伝いだけで何とか生計を立てている。子供を三人抱えているので、この様な非常時でも仕事を断ったり休むことはできないのだ。これだけの掃除を年老いた父にやらせる訳にはいかない。ただでさえ、父は教区長になったばかりでこの震災を迎えた。あちこち連絡をして飛び回っている。父の負担を少しでも軽くするために根を詰めた。

掃除をしている間にも、あちこちから電話やメールが届く。皆原発のことを心配している。東京の親友O君からも何度も電話をもらった。「原発は本当にヤバイ！放射能の被害は恐ろしく、子供にとつては致命的だ。一刻も早く逃げろ！」ということだった。私は、「まあ、大丈夫だろう。まだ本堂の片付けが終わってないから離れられないよ。彼岸前にはそっちに行くから、その時に子供たちも横浜（妻の実家）に連れて行くよ」などと呑気に応えていた。正直、すぐに収まるだろうと思っていた。新聞やニュースをゆっくり見ている時間も無く、実際に何が起きているのかを知らずにいたのだ。喉の痛みを感じるようになっていたのはこの頃からだ。そして鼻血も出ていた。下痢もし始めていたと思う。後でわかるが、これは実は被曝による初期の症状であった。この13日に福島に数時間滞在しただけでホールボディーカウンターによる検査で内部被曝が見つかったという報告がある。家族も喉の痛みがでていたが、これはおそらくヨウ素によるものだろう。うがい薬でうがいた後に喉がヒリヒリと痛むと思うが、そんな感じである。その後、いわきと東京を往復していて、いわきに入ると喉が痛くなる

いうことが2、3ヶ月ぐらい続いただろうか。ヨウ素は半減期が短いため、治まるのも割合早かったのだろう。

14日になり、朝から本堂の片付けをする。親戚も来て手伝ってくれた。薄磯修徳院の猪狩僧正の容態が悪く、危篤状態にあると聞く。透析を患っておられたが、震災で水が無くてそれもできず、さらに肺炎に罹ってしまったらしい。父をはじめ、家族中で心配をした。昼前に妻と下二人の子を連れて買い物へ出た。私も妻も呑気な方で、ガソリンも並ぶのが嫌で、それまで入れていなかったし、買い物も同じ理由でしていなかった。ガソリンを入れに国道6号線に出た。相変わらず並んでいたが、そろそろ入れておいた方が良いと思って列に並んだ。しかし、なかなか列が進まない。おかしく思ってたスタンドの人に聞きに行くと、「ガソリンはあるのだが、原発の関係で上からストップが掛かっている。いつ解けるかわからない」ということだった。「なんだ、それは！何で原発が関係あるんだ？」不思議に思ったが、仕様がな。諦めてそのまま四倉地区の様子を見に行こうと6号線を北上したが、神谷地区で通行止めになりその先は立ち入り禁止になっていた。急にその近くの海岸線にある行きつけの喫茶店が気になり、見に行くことにして海まで車を走らせた。防風林の海岸線に海に面して建っているその店の名はまさに『防風林』といった。海側に面した大きな窓ガラスは割れ、空調の外機も破壊されていた。皮肉にも海は穏やかで、静けさが広がっている。「ここは復活できるのだろうか。地震のあった日は金曜日で定休日だったから、不幸中の幸いだったな。海岸線沿いにある他の店の人達は大丈夫だったかな」そんなことを考えながらそこを去り、買い物に向かった（9ヶ月後、この喫茶店は更地になっていた）。

実はこの時、すでに1Fの3号機が爆発していたのだ。父と長女は原発から約40km離れた自坊でその爆発音を聞いたという。子供も妻も更に喉の痛みを訴えていた。「被曝する前にはヨウ素剤を飲んだ方がよい。無ければイソジンで代用。昆布にもヨウ素が含まれるから食べた方がよい」と妻が友人からメールで情報をもたらしていたの

で、買い物がてらに薬局で探してみるが、何とどこへ行ってもイソジンは既に売り切れていた。ティッシュやトイレットペーパーも売り切れ。昆布とマスクは購入できた。買い物も非常に混んでいて時間が掛かったが、何とか食料品を買い込むことができた。その後再びガソリンを入れに行く。今度は入れることができたが、2000円分しか入れてもらえなかった。どこでもそうなのだという。

緊迫する原発の状況 緊急避難

自坊へ戻り、また本堂の片付けをした。3号機が爆発したということを聞き、妻も段々心配になってきたらしく、大丈夫かどうか私に意見を求めてくるようになる。私もたまにテレビを付けて状況を見るが、原発や放射性物質についての知識はほとんど無く、判断することができない。ただ、枝野官房長官の「直ちに健康に影響がでるレベルではない」という言葉には不信の念を抱いた。「直ちに」とはどういうことだ？「いつかは影響がでる」と言っている様なものではないか。友人からは早く逃げるように頻繁に連絡がくる。「一体、原発はどうなるのだ？」旧ソ連のチェルノブイリでの事故が脳裏を過る。しかし、本堂の整理はまだ終わらない。これではお彼岸に檀家さんを上げられない。夜になり、妻に「万一のことを考えて、荷物をまとめておくように」と指示をした。とにかく片付けを急いだが、何とか人を上げることができると片付いたのは夜の12時過ぎだった。「とりあえず、今はここまでしかできないだろう。」と本堂掃除を終え、今度は自分の荷物をまとめはじめた。テレビを見てもまだ避難すべきかどうか判断できない。「とりあえず、車に荷物を積んで、いつでも横浜に行けるようにしておこう。そして朝まで様子をみよう」そう言って荷物の準備が終わったのは午前2時頃だった。余震の続く中、少し仮眠しようと、情報を得るためにテレビを付けたまま居間で横になったその時、携帯電話が鳴った。「誰だ？こ

んな時間に！」ビックリして電話にでると、先輩からだった。「原発が本当にヤバイらしい。今、知人の記者から連絡が入った。とにかく早く逃げろ！」ということだった。ちょうど荷物の準備を終えてすぐに掛かってきたこの電話に、私は何の疑問も持たなかった。「これは仏さんが今すぐに避難しろと伝えているに違いない」そう思い、子供たちを叩き起こして車に乗せた。そして、市内に住む友人何人かに電話をして情報を伝え、両親も起こして事の次第を伝えて逃げるように説得した。しかし、「テレビでもう少し様子を見てから行く。お前たちは先に行け」と父に言われ、仕方なく「必ず、はやく避難するように！」と返して自坊を後にした。もしかしたら、もう二度と戻る事ができない可能性もある。大事なものはほとんど持ったが、一番大切にしている宝物である持仏は、残された者やこの土地を守ってほしいという思いと、また必ず帰ってくるという誓いにより、置いて行く事にした。

実はこの時間帯からいわき市内の放射線量が急激に上がり始めていたことが、後日判明した。一時は23マイクロシーベルト/時という高い線量を記録した。ちょうど風が南に吹き、私達を追う形で東京方面に放射性物質がやってきたのだった。途中で追いつかれたかもしれないが、何とかギリギリのところまで、子供たちを高線量の被曝から守る事ができた。避難を勧めてくれたO君、電話をくれた先輩には本当に感謝している。この日の午後には風の吹く方向が北西に変わった。この風によって運ばれた放射性物質が雨によって地上に落ち、1Fから福島市に渡る高線量の汚染地帯を作り出した。本当にちよつとした差で、1Fから東京辺りまでが高線量で汚染される危険性があったのだ。もし、風が北風のままで、そこに雨が降っていたら、自坊は元よりいわき市は強制避難、東京までもが人が住むことが困難になっていたかもしれない。避難区域に入っていなかった県民も、この日から多くの人が県外に脱出、避難したのだった。車の避難渋滞も起こっていたらしいが、私達は早い時間に出たので

巻き込まれずに済んだ。

午前3時前、車二台で避難を開始した。妻と私で別々に車を運転する。高速道路は、常磐道は全線不通になっていたので、国道6号線を南下した。一度、O君の勤める寺院に寄って車を一台置かしてもらい、それから首都高速で横浜の妻の実家に行くことにする。途中、北茨城の海岸線を通ったが、その被害も大きかった。国道に海の砂が乗り上げ、車が道端にひっくり返り、家屋も破壊されていた。津波の恐ろしさを改めて実感した。道路も地震の影響であちこちに段差ができていて走りづらかった。まだ夜明け前だというのに、ガソリンスタンドには車が並んでいた。中には人が乗っておらず、車だけ列に並べてあるものもあった。仕事で車を使う人達が必死になってガソリンを求めているのだろう。

水戸を過ぎた辺りで夜が明けてきた。途中コンビニに寄るが、ここでも食料となるものは売っていなかった。車のラジオから1Fの2号機と4号機が午前6時過ぎに爆発したとのニュースが流れた。家に電話をして両親が避難したかどうか確かめるが、未だに避難していない。早く避難するように再び説得するが、「今日は記者が現地の取材にくるので案内しなければならぬ。大丈夫だから心配するな」ということだった。

何ということだ！とんでもない事態になってしまった。福島はチェルノブイリのようになってしまうのか。未だ避難できずに残っている人達はどうなってしまうのか。否、人間だけではなく、他の生物にも、植物にも、かなりの影響が出るだろう。生態系のバランスは崩れ、その土地や海は長く汚染される。仏教者の環境問題への取り組みを提言していた私には非常にショッキングなことであった。まさかこれ程までの危険が身近に潜んでいたとは、夢にも思わなかったからだ。原発の安全神話を鵜呑みにし、それ自体が何なのか、一度も検討した事がなかった。自分の無知と無自覚を大いに恥じるとともに悔やんだ。残された者や汚染される土地の生き物や植物達

のことを思うと涙が止まらなくなった。「頼む、あの土地を護ってくれ！」と祈らずにはいられなかった。私はこの避難の最中、全てが失われるかもしれないという思いの中で、本当に大事なものは何かということを痛感していた。それは海でもあるし、山でもあるし、土地でもあるし、そこに生きる生命すべてでもある。たとえ繁栄が無くても、そこにあるもの、生かされているものすべてが貴く、大事でないものは無い。ただ、すべてが健康で生きてくれ…その時の願いはそれだけであった。

友人達にも、もう避難をしたかどうか連絡を取りながら東京へ向かった。まだ避難していない人には早く避難するように促した。途中仮眠をして昼過ぎにはようやく柏まで来た。ガソリンが心配になり、入れるためにスタンド渋滞に並ぶことにした。20、30分並んでようやく自分の番が来た。スタンドの店員が給油口に注ぎ口を入れた瞬間、スタンドの電気が切れた。「停電です!」「えっ!？」なんと急な計画停電で給油できなくなったという。東北・関東は原発事故により電力不足が懸念され、計画的に輪番で停電する事になったのだ。「このタイミングで…!」仕方が無い。横浜までは何とかもつだろう」と気を取り直して東京に向かう。道も混んでいて、東京の友人O君の勤めるお寺に到着したのは午後三時過ぎだった。皆さんに温かく出迎えていただき、ホッと一息つくことができた。御寺院のご好意で車を一台置かせていただき、横浜へと向かった。首都高速道路は通行できたので、高速に乗り、1時間ほどで妻の実家に到着した。もう夕方で日が沈みかけていた。妻の両親も大分心配していたのだろう。孫の顔を見て安堵したようだった。すぐに風呂に入り、着ていた衣類はすぐに洗濯して、付着しているかもしれない放射性物質を払った。私は、妻や子供達にかけた危険や今後の不安に対して、妻の両親に申し訳なく思った。妻が私と結婚して福島に嫁がなければ、こんな心配も掛けずに済んだに違いない。

東京での仕事 原発の情報

翌16日からは東京での仕事が一週間ほど続いた。その間、両親や友人に何度も連絡をして、お互いの状況や福島の様子を話した。父は2月から福島第一教区の教区長に就任しており、とても避難できる状態ではなかった。毎日忙しく飛び回っているらしかった。本人にも避難するつもりは無く、修徳院の猪狩僧正が危篤状態にあり、避難を説得する私に「猪狩さんを置いて逃げるわけにはいかない」と何度も言っていた。政府が避難区域を拡大してくれば皆が避難できる。アメリカは福島第一原発から80kmまで、自国民に対して避難指示を出したという。「日本政府は何をやっているんだ！」政府の後手後手の対応に苛立ち、原発の危機的状況に不安を募らせた。18日には事故評価がレベル5になっている。また、東京消防庁の隊長らによる涙の会見などがあって、事故の深刻さが轟轟と伝わってきた。後に菅元首相が、「最悪のケースでは東京を含む首都圏の三千万人も避難対象になるとの想定をしていた」と語り話題になったが、未だ爆発の可能性があり非常に危険な状態だったようだ。オバマ米国大統領は「潜在的予防措置を取る必要があるのは当然だ」と述べたが、全くその通りだと思う。結果的に1Fから福島市まで80kmぐらいが高線量で汚染されたのだ。アメリカのとった措置は正しかった。

猪狩僧正は本当に残念なことだが、18日にお亡くなりになられたとの連絡を受け、心よりご冥福をお祈りした。

いわきへの帰宅 掲示板への支援要請

仕事も一段落付き、横浜でのガソリンスタンドの渋滞も無くなり、満タンにすることができた。21日には常磐道も、水戸IC〜いわき中央IC間が通行可能になった。子供達を妻の両親に預けて、妻と一緒に自坊に戻るこ

とにする。いわきでは、放射能汚染の被害や原発の事態悪化を恐れて物流がストップし、スーパーが開かず、コンビニにも食品などの品物が入ってこないという。ガソリンも入ってこないので動きも取れないとのことだった。政府は首都圏よりも被災地を優先させてガソリンを供給していると言っていたが、まったくのウソだ。首都圏ではもう渋滞すら起こっていなかった。避難している友人からは、「危ない！ 行くな、帰るな！」と言われたが、自坊に残っている両親が非常に心配になってきた。22日に横浜で食料を車に積めるだけ買い込んだ。あるスーパーでは、カップ麺が一人2つまでと数量制限されており、被災地の窮状を説明してなんとか多めに販売してくれるように頼んだが、断られた。頭に来て、つい大声で怒鳴ってしまった。それほど故郷に危機感を抱いていた。買い物かごに入っていた物を全て返し、別のスーパーで買うことにする。ダイエーでは同じくカップ麺の数量を制限していたが、事情を説明すると快く制限せずに販売してくれた。その後、恩義を感じて私は主にダイエーで買い物をするようになった。

翌23日、いわきに向けて出発した。首都高を降りてから水戸を過ぎるまでは国道6号線を北上した。途中のホームセンターでガソリンの携行缶を買おうと思ったが、どこも売り切れだった。運転中に、段々といわきの状態に深刻さを感じはじめた。ふと大覚寺派の知人から「智山派がインターネットで震災掲示板を出しているみたいだから、何かあったら活用してみたら？」とメールをもらっていたことを思い出した。「何とかしなければ」という一心で、携帯電話からインターネットを使って掲示板を書き込み、食料・水等の支援を願った。程無くして様々な方々からご連絡をいただいた。掲示板のシステムを理解していなかった私は、次から次へとくるメールや電話に当惑してしまった。支援は本山や智青連から送られてくるものだと思っていたのだが、その掲示板を見て支援を決意して下さった方々から直接送られてくることになっていったのだ。皆さん、温かい御支援を申し出ていただ

き、本当にありがたく感じた。しかし、放射能汚染のせいで自坊まで宅急便が届かないという。仕方が無いので、「支援の代わりに、どうか祈ってください」とお願いするしか無かった。驚いたことに、そのメールを見て、千葉から車で食料等の物資を積んで自坊まで届けてくれた方がいる。その方は、私よりも速く自坊へ到着し、私が帰った時にはもう戻られた後だった。放射能汚染の影響で誰も近づきたくない福島に、しかも原発から然程遠くないのに、すぐにいわきまで来てくださったのだ。そのご恩情と勇氣に心から感謝した。その食料・物資は、さっそく避難所や近隣寺院、必要とされている方々へお配りした。また、福島第一教区青年会会長の久野雅照師の御自坊安養院は小名浜にあり、宅急便も小名浜の営業所までなら届くということで久野会長にお願いしたところ、「自分達もやろうと思っていた」とありがたく窓口になっていただくことができ、全国から多数の温かい御支援を受けることができた。中には何度も御支援くださった方もいて、本当に頭の下がる思いだった。その後、徐々に物流が回復し、皆様のお陰で何とかその窮地を凌ぐことができた。

ボランティア活動のはじまり

安養院に支援物資が届いているというので妻と一緒に行ってみると、多くの荷物が届いていて客殿が一杯になっていた。深川不動から久野会長のご友人も駆けつけてくださり、とにかく仕分けをして避難所を巡って物資を届けてまわった。青年会員にも呼びかけ、皆忙しい中、だんだんと参加してくれるようになっていった。避難所では大変感謝され、喜ばれた。「キリスト教は2度来てくれたが、仏教は何をやっているんだと思っていた。坊さんもちゃんと助けてくれるんですね」と言われ、やって良かったと思うとともに、キリスト教の対応の速さに驚かされた。原発避難区域の避難者よりも、まずは津波で家財や家族を失った方々の避難所を優先して回った。そ

ういった辛い思いをされた方の中にも、「ここよりも〇〇の避難所が大変だというから、そこへ行ってやって下さい」と、自分たちも大変なのに他を気遣って優先される方がいらつしやり、人間の美しさを感じた。

こうして青年会のボランティア活動がはじまった。また、栃木教区をはじめ、全国から多数の方々に参加に追加していただき、御支援をいただいた。どれだけ皆様方に励まされ、力をいただいたか知れない。私自身は東京での仕事や自坊の修復・雑用などで多忙を極め、あまり活動に参加できなくなってしまい、本当に申し訳なく心苦しい思いだった。

一方で、4月から伝法院で環境問題をテーマにして取り組みことになっていた私は、この原発事故を経験することによって放射能汚染こそが人類最大の環境破壊と見定め、この問題に宿命を感じ、これに挑むことこそが自分に課せられた大きな仕事であると決意するようになっていった。

二ツ箭山へ登拝祈願

私は震災前まで、いわきの名峰二ツ箭山によく通って登拝修行をしていた。多い時には週に2、3度行くこともあった。この山は高くはないが、沢があり、滝があり、森があり、魅力的な花々や木々があり、雄大な岩場もあっていわきを一望できる。隠れたところに秘密の行場や大木があり、ルートが何通りか選べて飽きないし、半日で一周できる。数多くの山に登ってきたが、これほどコンパクトに纏まっていて楽しめる山はそう無いと思う。岩場を攀じ上り、てっぺんで法螺貝を吹き、法楽をあげる。そしていわきの海や街を眼下に、虚空を前に座禅をする。真に自然と溶け合うようだった。

この山は原発の30キロ圏内にある。山上は放射線量が高く被曝することは容易に想像できた。強い余震も続く

し、地割れや崖が崩れているかもしれない。でも、どうしても登って祈りたい。こういう事態だからこそ僧侶が祈らずに何をするというのか。私は衝動に駆られ、3月下旬に登拝することを決めた。警察に事情を話して圏内に入れてもらい、もう暫くは登ることが無いだろうと、お山にお世話になったお礼や別れを告げつつ峰に入った。見た目の自然は何も変わらない。だが、もうこの沢の水は飲めないだろう。あるいはここに住む生物、植物にも何かしらの影響がでるかもしれない。そう思うと目に涙が溢れた。「済まない。人の愚かさを許してくれ。神仏よ、この土地を、そしてどうか福島を護ってくれ」深い悲しみとともに心の底から泣き、祈りながら登った。地震の影響で大きな岩がズレている場所もある。突然、ドォーン！という音がして、雉が鳴きながら飛んで行ったかと思うと、目の前を直径40cm大の岩が猛スピードで落ちていった。地震による落石だった。「あれに頭が当たっていたら即死だったろう。震災で亡くなられた方々も一寸の差だったのかもしれない。死と生は、ほんの一瞬、紙一重でしかない。今、自分は、もしかしたら死んでいたかもしれないが、生きている。生と死とは、そんなに変わらないのかもしれない。ただ、今…、自分はまだ生きている！生かされている！この命で自分は一体何をしたいのか？…自分はいつまで生きるのか分からないが、この命は神仏に捧げよう。全力でこの問題に取り組もう」ある種、極限状態だった私は素直にそう思えたのだった。そして事故収束のために命懸けで働いている方々や被災者の無事を、亡くなられた方々の菩提を祈り、峰を下りた。

数日後、二ツ箭山は落石や崩落のため入山禁止になった。また、放射性物質による海洋汚染も深刻となっていた。私は地元の愛する山と海が奪われたことを悲痛に感じた。福島の自然は永く閉ざされてしまったのだ。

子供達の転校

お彼岸過ぎから、私はいわきと横浜を行ったり来たりしていた。首都圏でも、水道から放射性物質が検出されたり、土壌の放射線量が上がっていたりと、ちょっととしたパニックが起こっていた。福島県民への差別も起こっており、子供がいじめられたり、生活での支障が報道された。婚約が破談になった方もいると聞いた。そんな中、福島から県外に避難していた人達も会社や学校があつたりして徐々に自宅へ戻りはじめた。市内の水道の復旧状況は5割で、依然断水している地区が多かったが（どの道、放射性物質が検出され、飲める様な状態ではなかったが）、避難している家を狙った空き巣も多発していたので、心配に戻った人もいるだろう。メディアでも御用学者達がしきりに安全を訴えていたので、それを信用した人も多かったと思う。私もそうであつたが、放射線に對しての知識に乏しく、意外に大丈夫なのではと思ひ始めていた。先輩の知人の放射線研究者の話でも、今のいわきの線量なら問題ないとのことだった。子供達の新学期が始まるので、特に一番下の子は小学校に入学するので、それまではいわきに戻るつもりでいた。ところが、原発の事態は一向に収まらない。妻に「とてもではないが子供達は帰せない。」と言われ、妻の両親にも「まだ危ない。一年ぐらいは様子をみないと無理ではないか」と言われる。転校させれば子供達はいじめに遭うかもしれない。大分迷った末、妻が心配のあまりノイローゼになつても困ると思ひ、そして健康を第一に考へて、子供達を横浜の学校に転校させ、妻の実家に暫くお世話になることにした。果たして妻子をいわきに帰せる日が来るのだろうか。もし、離婚すれば妻や子供達は福島に戻す必要がなくなる。その方が妻子のためになるのではないか。真剣にそのようなことを考へはじめた。今でもそう思うことがある。実際に『原発離婚』などといつて原発事故が原因で離婚する家庭が増えていると新聞にあつた。いず

れにしろ、子供達の健康や将来の責任は親にある。家族にとって一番よい方法を選んで行くしかない。

4月11、12日 巨大余震 復興祈願祭

親友O君の実家は石巻だ。石巻は津波で大被害を受けた。O君の実家も浸水して、両親は無事だったが、避難所で生活しているという。最初は安否も分からずO君もさぞ心配しただろう。O君が石巻の様子を見に帰るというのでその仕事の穴埋めもあり、またご住職やご家族の私の生活を案ずる御厚情から、彼の働くお寺でよくお手伝いをするようになった。本当にお世話になりっぱなしで感謝の念に耐えない。

4月11日はそのお寺にお手伝いに行き、夕方からいわきに帰る予定だった。翌12日に豊間小学校で、薄磯・豊間地区の復興祈願祭が行われるからだ。お寺の仕事が終わった夕方、東京でも大きな揺れを感じた。テレビではいわきが震源地で、震度6弱あったということだった。自坊や原発は大丈夫か？急いで帰りたいが、地震のせいで常磐道は通行止めで使えなくなってしまった（この時までには全線復旧していた）。お寺を出て暫く時間を潰し、様子を見ながら常磐道の乗り口まで一般道で行った。午後の9時頃になってようやく勿来ICまでは通行可能になり、すぐに高速に乗っていわきへと急いだ。いわきでは地震のあと、市内各地で停電になり、大雨に雷の中、大きな余震も続いたという。1Fは一時注水がストップして緊迫したが、大丈夫だったようだ。この地震は直下型だったので市内では3月11日より被害が出た所も多い。大きな土砂崩れも起こった。自坊もそうだったが、数日前にせっかく復旧した水道（100%復旧が間近だったらしい）がまた断水した地区も多かったようだ。

翌12日は津波の被害が大きかった豊間・薄磯地区の復興祈願祭が行われた。被害を免れた豊間小学校の校庭に工事関係者が集まり、復興祈願の読経が響いた。その後、沿岸部でボランティア活動を行った。午後2時頃、ま

た大きな地震があった。二日連続で震度6弱の地震であった。津波が来る程ではなかったが、まだまだ大きな余震が続く毎日だった。そしてこの日、原発の事故評価は最悪のレベル7となり、チェルノブイリと並んだのだ。た。

僧侶といえども

僧侶といえども、原発に対しての意見は様々だ。四月の中頃、ある寺の住職は、日本の国益・産業の為には原発は不可欠であると熱く語った。何でこの時期に福島県民の私にそんなことを言うのか分からなかったが、当然私と言いつ争いになった。「お前は電気代が4倍になつてもいいのか。日本が発展途上国のように停電の多い貧しい国になつてもいいのか」と怒鳴るので、「かまいませんよ」と応えた。

もし、放射能汚染が原因で子供達が病気になるって鬼籍に入ることがあつたら、その母親の前で同じことが言えるのだろうか？また、無念のうちに自殺された農家や酪農家の方々のお墓やご家族の前で同じことが言えるのだろうか……。

私にとつては産業や景気よりも、人や生物のいのちや自然環境の方が大事だ。別に電気が無くても、その様に生活するからよい。却つてストレスが無くつて善いかもされない。他のお世話になつている寺院には『原発の無い時代は不幸であつたか』と書いた張り紙があつた。本当にそうだと思う。電気の無かつた時代でさえも不幸であつたとは思わない。生き物はきれいな土と水さえあれば生きて行ける。あの黒澤明監督もそういう思いで『夢』という映画を作つたのだろうか。

福島 の 産 業

事故後、農作物の出荷停止や風評被害で農家は大打撃となっていた。第一次産業にとつて放射能汚染により土地と家畜を奪われれば、死ねと言われている様なものだ。11月には、やはり県内の米から基準値以上のセシウムが検出されてしまった(暫定基準値自体が相当高いにもかかわらず)。観光業界にとつても同じことだろう。漁業も林業もだめだ。この事故で辛酸をなめている方々のことを思うと本当に忍びない。自殺者の話を聞く度に胸が痛む。飯館村などは、せっかくこれまで自立した農産業で、他に頼らず善い村作りをしてきたのに、もう生活して行くことは困難だろう。浪江町も、原発誘致の話があつてもずっと反対してきた。そういった町村に甚大な被害が出た。

福島県内の原発立地の自治体は原発に依存し過ぎて未だにしがみ付こうとしているところもある。だが、県内の原発産業も終わりだろう。そもそも原発周辺に人が住むことさえ難しい。今回の事故で福島の産業は悉く大打撃を受けた。増して、何万人もの県民が県外に流失している。精神的な不安や恐怖に堪えている人も多い。今後健康被害も多く出るだろう。福島県外でも線量が高い所は同じだ。本格的な差別も起こるかもしれない。国や東電が補償してもしきれないことが、現実起こってしまった。

だが、失つて初めて気付くこと、分かることもある。苦しみの中から光が生まれる。人が住んでいる限り必ず希望がある。福島だからこそ世界に発信できることがある。30年後、50年後あるいは100年後にFUKUSHIMAが、あの『うつくしまふくしま』と言っていたような土地に戻せるかどうかは、世界の負の遺産から光輝く街の象徴として生まれ変わるかどうかは、ひとえに県民の心に掛かっていると思う。

楢葉町町長、東芝社長、経団連米倉会長の発言

事故から1、2ヶ月して、2Fのある楢葉町の草野町長の発言が新聞に載っていた。原発について、「安全が確認されれば、再稼働に異論はない」とあった。この記事をみて、私と妻は言葉を失った。その後も草野町長は、「双葉郡の復興・発展のためには2Fの再稼働が欠かせない。雇用がなくなるから困る。原発をやめるつもりはない」などと明言している。自分達の町が汚染され、町自体が住めなくなるかどうかという時期に、たとえ帰っても健康被害が懸念される自治体の長が、未だに原発に未練がある。生命よりも原発の方が大事なのか。町民の健康があつての町ではないのか。本来ならば、土地を汚染された自分たちが率先して脱原発を主張すべきではないのか。福島県民の大多数は、すでに原発に反対である。皆が「原発さえなければなあ」と口にする。雇用が失われたとしても、生命を重視する方向を選ぶならば必ず神仏が力を貸してくれると思う。必ずその町は再生する。しかし、生命を犠牲にしてしまえば、そこには闇が漂うだろう。

同じく、東芝の佐々木社長、経団連の米倉会長の原発推進の発言や電力会社のやらせメールの発覚などにも驚きを覚えた。彼らはこれだけの事故が起きて国民の生命や健康が犠牲になっても何の責任も感じないのだろうか。

世論調査

各新聞社や共同通信、NHKなどの今後の原発についての世論調査の結果では、4月の時点では「止めるべきだ」「減らすべきだ」よりも「現状維持」「増やす」という回答が多かった。私はこれを見て愕然とした。まだ国民は目を覚まさないのかと。しかし、5月から世論調査の結果が逆転してきた。原発削減派が増えてきたのだ。

これは事故が一向に収まらないことや、徐々に東電や国への不信感が増してきた為だろう。メディアは相変わらずいい加減なことを言っていたと思うが、書籍やインターネットなどで真相を知ることができたとも考えられる。事実を知って、「原発など要らない」という意見が増えたのだろう。

4月28日 四十九日法要

震災による死者の四十九日法要を青年会が行った。いわき市内の、津波の被害が大きかった浜に行って供養をした。震災後、まだ確認していなかった沿岸の地区を見ることができた。海岸の地盤が沈下したようで、砂浜の地形が変わったり、以前より海が近くなっていた。その惨状に改めて津波の恐ろしさを感じた。まだまだ瓦礫は撤去されていないかった。小雨がぱらつく中、亡くなられた方々の菩提を皆一心に念じたのだった。

親友の鬱病・自身の心臓痛 震災の後遺症

いわきの親友M君は、事故後に私の連絡を受け、同じ日に家族を埼玉に避難させた。その後、奥さんと子供は埼玉に置き、会社もあるため彼はいわきに戻った。このM君は淋しがり屋ということもあり、徐々に心が不安定になっていった。2年前にはじめた自家菜園の畑も放射能汚染で駄目になり、妻子と離ればなれというのが相当応えたらしい。電話が掛かってくるごとに様子がおかしくなっていた。いつも声が震えていた。不安で淋しくてたまらなく、夜は眠れず睡眠も浅く短くなつたという。また、ちょっとしたことで攻撃的な発言が増えてきた。これは心的外傷後ストレス障害（PTSD）の症状だと思い、決して本人を否定せず、聞くことに徹して、なるべく医者に行く様に勧めた。本人にも自覚があり、「自分はおかしい。鬱病かもしれない」と言っていた。結局彼

は、毎日誰かと会って食事をしたり遊んだりしてそれを紛らわしていたが、それにも限界があり、症状が悪化してきたので医者に行った。軽度の鬱病と診断され、安定剤をもらって暫く服用していた。徐々に回復に向かい、今では大分良くなったが、一時は自殺まで考えたという。「何もやる気がしない。死にてえ。死んだ方がましだ」などとよく言っていた。今でも震災や原発の話をすることを極端に嫌がる。もう考えたくないと言ってしまうのだ。こういう人が実は福島には少なくない。福島で生きて行かなくてはならないから、放射能汚染のことを考えても現状は変わらず心が苦しくなるだけだから、それをなるべく忘れる様にするのだ。放射性物質がどんなに危険でも、目に見えないためにそれができるのだ。

また、石巻で被災したO君の父親も、やはりPTSDの症状が出ているという。被災地では多くの人がそのようなっていたと思う。神経が過敏になり、気が張っていて睡眠不足になっている人が多かった。

私自身も、深刻化していく原発事故のニュースや、東電や経産省の震災前までの安全管理の杜撰さ・隠蔽などや、原子力推進に関しての話が報道される度に不安や憤りを覚え、原発の話聞くことが嫌になっていた。ネガティブな情報を聞く度に動悸がして心臓に痛みを感じるようになった（後述するが、この心臓痛は被曝による可能性がある）。いつの間にかニュースや新聞を避けるようになっていった。それでも原発や放射性物質の話は、日常の生活の中で耳にし、口にせざるを得ない。よく眠れなくなり、いつも気が張っていた。このような状態が7月ぐらゐまで続いた。

これらは震災の後遺症と言えるだろう。

祖母の死

6月17日、祖母が他界した。行年97歳であった。よく激動の時代を生き抜いて、寺を守り、沢山の子供達を育ててきたと思う。心よりの感謝と菩提を念じた。6月21日に密葬、7月30日に本葬を行った。実はこの時に、3月11日の地震の前に障子の手入れをしておいたことが役に立った。その後は忙しい毎日で、とてもそれをしてい
る暇はなかった。密葬・本葬とも子供達をいわきに連れて帰った。子供達にとっては久しぶりの帰宅で、大喜びしていた。両親も孫の顔を見て嬉しそうだった。密葬には6月19日に帰ったが、調度その日の夜、東電は1Fの2号機の二重扉を開放して放射性物質を放出した。東電は「環境への影響は極めて少ない」とし、保安院は「問題は無い」と評価したが、各地で線量が上がり、私も家族も喉の痛みを感じていた。

また、季節が夏になり、暑さのあまり家の窓を開けざるを得なくなってきた。両親も窓を締め切りにかけて我慢できるわけがない。それまで放射性物質が家の中に入ることを防ぐために窓を開けないようにしてきたが、どうしようもなかった。

前福島県知事の告発

7月頃から心の安定を取り戻してきた。この頃から原発の関連書籍を買い漁り、読み始める。妻は既に何冊か読んで知識や情報を得ていた。私から見ると放射性物質に過敏になって見えたが、後になってそれが正しいことが理解できた。これだけ情報が氾濫していると何を信じていいかも分からない。特に放射性物質の影響に関しては意見が大きく分かれている。しかし、何かしらの繋がりが事実が浮かび上がってくるはずだと信じて、

気になる本から読み始めた。その一つに前福島県知事佐藤栄佐久氏の『福島原発の真実』という告発本がある。ここには佐藤氏が知事時代から経験した国や東電の嘘と欺瞞がよく書かれていた。そして驚くべきことに、東電や国の原子力政策のあり方に懐疑的で県民の安全を守るために、ことある度に対立してきたこの前知事は、国に填められて汚職事件を捏ち上げられ、知事を抹殺されたというのだ。収賄額0円という前代未聞の有罪判決だという。前知事はプルサーマルに反対していた。それが国や東電には邪魔だったのだろう。杜撰な安全管理、隠蔽や改竄、嘘と欺瞞による原子力推進。今回の事故は決して「想定外」ではなく、起こるべくして起こっていることが分かった。

「経産省の中に資源エネルギー庁と原子力安全・保安院が一緒になっているということは警察と泥棒が一緒になっていることと同じだ。早急に分離させなければならぬ。問題の本質は東京電力ではなく経産省にある。原発に頼る地域振興の問題点は、原発ができれば人口は増えるが、一世代で終わり、世代間の共生にはつながらぬ。建設業は増えるが農業は無くなる。残るのは放射能を含んだ使用済み燃料だ」と佐藤前知事は言う。この本で国や東電に対する不信感を更に強めた。

避難先の移動

7月下旬、妻の実家から妻子を移動させた。妻の両親から、「1学期くらいで何とかしてくれ」と言われてしまったのだ。団地暮らしの老人二人にとって、騒がしい小学生3人と生活することには限界があったのだろう。ただ、この事態にそう言われたことに、正直私は大きなショックを受けた。もともと私は4月にいわきに連れて帰るつもりだったが、妻の両親が「一年ぐらいいは」というので子供達を転校させた。やっと慣れてきた学校なのに、

また転校させろというのか。妻は相変わらず子供の被曝を心配してまだ福島には帰せないと言う。「もし数年後に子供達が病気になったら一生後悔する」と言うのだ。しかし、自分の経済力から言って妻子を住まわせておける様な所を借りることは不可能だ。妻の両親に対して「震災がきっかけで大変な思いをしているのはあなた達だけではない。離婚すれば、あなた方が面倒見ざるを得なくなるのではないか」と考えもしたが、ここで自我を入れて迷うのではなく、全ては神仏にお任せしようと心に決めた。「なる様にしかならない。流れに任せよう」そう思って神奈川県に相談したところ、県の用意した被災者のための借り上げ集合住宅があるということだった。何と、妻の実家から1kmぐらいの集合住宅に入居できることになり、子供達も転校させずに済んだ。赤十字から家電6点セットも頂戴し、2年間居れることになった。有り難い限りだ。この2年の内に原発の事故収束と除染が進むことを祈りたい。今となつては妻の両親にも大変感謝している。

政府・御用学者・マスコミへの不信

様々な本を読み進めるうちに、自分達がいかに危機的状況に置かれているのが理解できてきた。政府の発表やメディアの報道を鵜呑みにせず、書籍やインターネットなどで自分自身で調べることの大切さを痛感した。日本よりも海外の情報の方が余程正確である。東電は元より、政府や御用学者、そしてマスコミでさえも信用できない状況だ。マスコミの大部分は東電に広告料などで懐柔されている。国からの圧力もあるだろうが、マスコミが自主規制してしまふのだ。都合の悪いことは情報が操作され、また隠蔽されてしまふ可能性がある。

緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム『SPREDI』（スピーディー）やメルトダウンの公表についても驚かされた。スピーディーはこれまで百億円以上かけて整備が進められてきた。事故発生からわずか15分程度

で予測データを国や現地の災害対策本部に送ることができ、住民の安全をいち早く守ることが開発の最大の目的だったという。住民が避難する前に、その計算結果によって最適な避難方法を決めて避難してもらおうのだ。ところが、国や県はその予測データを得ていたが、住民のパニックを恐れて暫く公表しなかった。百億円以上かけたことが全くの無駄になったのだ。そのせいで放射線量の低い場所から高い場所に避難してしまった人や非常に高い線量の場所に居続けた人は多い。ある程度避難する方向を示唆してくれていれば、後の健康被害は防げたに違いない。

メルトダウンについても、国や東電は事故が発生して以来、炉心の溶融⇨メルトダウンは起こっていないと繰り返してきた。それにもかかわらず、事故から2ヶ月経った5月中旬に1Fの1号機が地震発生から約5時間後にメルトダウンを起こしていたことが公表された。さらに、2号機・3号機でもメルトダウンが起きていた可能性が高いことが明確になった。いわきでは、もつと前に既にメルトダウンしているとの情報が流れていたのだが…。

この様な隠蔽体質は原子力産業には付き物だが、この問題にはもつと根深いものがある。それは、御用学者やメディアを使って低線量被曝の影響を隠蔽するということに最大の問題があるのだ。それが明らかになれば、原子力産業は非難を浴びて衰退せざるを得ない。そのために徹底的に隠そうとするのだ。それは日本政府が事故後に行っている方針や決定を見てもよく分かると思う。政府がとっている対策はチェルノブイリの事故で旧ソ連が下した判断よりもはるかに酷い。

アメリカの原子力規制委員会は翌2012年2月に情報公開法に基づいて福島事故発生直後の委員会内部のやり取りを記録した議事録を公表したが、何と、日本では原子力災害対策本部の会議の議事録が作成されていな

かったことがわかった。この国は一体どこまで隠し通すつもりなのだろうか。

お盆の帰省

8月のお盆に子供達を福島に連れて帰った。子供達は従兄弟と遊べるので大喜びだった。私は毎年、他の寺院の棚経のお手伝いで自坊には居ない。14日の夜、その手伝いから自坊に戻ると、子供達が平気で家の畑で取れた野菜を食べていた。私は妻を叱責した。外部被曝よりも内部被曝が恐ろしいことは妻も知っていたはずだ。妻は「従兄弟の子達も食べているから、うちだけ食べないなんて私からは言いづらい。伯父さんにも子供達には好きな様に食べさせてあげてくれと言われてしまった」と嘆いた。「それでも食べさせないのが母親の役目だ。俺にきつく食べさせるなど言われていると言えはよかっただろう」と酷い言葉で返してしまったが、それほど子供達の内部被曝を防ぎたかった。両親や伯父にはもちろん悪気はない。咎める訳にはいかない。ただ、行く前にちゃんと釘を刺しておけば良かったと、自責の念に駆られたのだった。

『DASH村』に感動 ひまわり除染の効果

9月、『ザ！鉄腕！DASH!!』というテレビ番組で「DASH村」が放映された。「DASH村」は福島県浪江町にある山の中の集落をロケ地に行っている。そこは大分放射能に汚染されてしまった。TOKIOのメンバーの一人が防護服に身を固め、震災以後はじめて訪れた。やはり村の線量は高い。それでも、時間が掛かっても何とか村を再興したいと彼は言った。ひまわりの除染などを試していくと言っていた。私はそれを見ていて、彼やスタッフ、番組制作者に感謝の念を抱いた。よくぞ村に行ってくれた。そして再興の言葉を言ってくれた。その

土地を元に戻すことは厳しいと思うが、あの番組が福島に与えた希望は大きかったと思う。

後日、ニュースでひまわりによる除染はあまり効果が無いという報道があった。除染自体にも限界があり、線量が60%ぐらいにしか下がらないとの報告もある。屋根瓦やコンクリートに染み付いたものはどうやっても落とせないという。片や除染がビジネスになりつつあるという現状もあり、どこまで除染の効果があるのか疑問が残る。とにかく、外部被曝はある程度は仕方が無いとしても内部被曝だけは避けられる環境にしていかななくてはならないと思う。

避難・除染の対象

国は年間放射線量20ミリシーベルトを超える地区を避難の対象とした。そして4月19日付の文科省通達では、子供の年間の被曝限度も暫定的に20ミリシーベルトと定めている（御用学者であった小佐古内閣官房参与が涙の辞任会見をして抗議し、再度見直しを求めたことは周知の通りである）。

除染については、9月末に年間5ミリシーベルト以上でないと除染の援助がないと発表した。その後、細野原発事故対応相が5ミリシーベルト以下でも出来る限り支援すると発表。10月10日には環境省が年間1ミリシーベルト以上の地域を除染対象にした。また食品の暫定基準値も許容上限年間5ミリシーベルトの内部被曝を考慮して定められている。

これをチェルノブイリの場合と比較して考えてみよう。

チェルノブイリの事故から5年後、ウクライナでは移住に関する法律が作られた。移住の基準になる数値は以下のようなものである。

・無条件に住民避難が必要な区域

セシウム137の汚染が15キュリー／平方キロメートル以上、個人被曝量が年間5ミリシーベルトを超える地域で、この区域は危険地域であり、住民の常時居住は不可能である。この地域は農業禁止地域とし、土地所有者、耕作者の土地は没収される。

・暫時住民避難が必要な区域

セシウム137の汚染が5～15キュリーの間であり、個人被曝量が年間1ミリシーベルト以上の区域で、この区域は住民避難が将来行われる。放射線環境と住民の放射線防護に直接関連していない新しい事業の建設、既存の事業の拡大と再建を禁止し、居住する住民の放射線による発病の危険性を低下させるために住民避難を段階的に行う。このための費用は補償する。

・放射線管理区域

セシウム137による汚染が1～5キュリー、個人被曝量が年間1ミリシーベルトを超さない区域で、住民の定期健康診断と、農産物の系統的な放射線管理、水・土壌・空気の汚染監視、環境に有害な影響をもつ新事業の建設や事業の拡張および再建を禁止するなどの衛生予防措置が行われる。

ベラルーシでの汚染地区分も、ウクライナのものと同じである。

しかし、ソ連の体制崩壊と経済破綻で多くの人が汚染地域に取り残され、健康被害が急増して行く。一般に言われている様に癌・白血病ばかりではなく、呼吸器系疾患・血液疾患・腫瘍などあらゆる疾患が7年後から大幅に増加した。さらに脳梗塞や糖尿病など一般には高齢者の罹る病気が青年中年で増えた。子供は成人よりも罹患率が高く、心臓血管系疾患は成人の30倍以上になった。さらに、仮死状態の出生や自力呼吸ができないなどの出

生異常、消化器系や検疫系の発達に異常をきたす新生児なども増えた。

とりわけチェルノブイリの教訓において重要なのは、健康被害の原因となった外部被曝と内部被曝の比率について、外部被曝が24%であるのに対して内部被曝が76%であったことだ。呼吸や食事によって摂取された放射性物質が4分の3を占めた。このためウクライナやベラルーシでは事故からようやく10年後に食品の基準値を大幅に下げた。外部被曝と内部被曝を併せて1ミリシーベルトを超えないという基本方針からそれぞれの食品の基準が定められた。セシウムについては、飲用水2ベクレル/ℓ、野菜40ベクレル/kgといったものだ。これによって健康被害が改善されてきたという。これに比べて日本の食品に関する暫定基準値は年間5ミリシーベルトを許容させ（しかもヨウ素は別枠で含まれない）、飲用水200ベクレル/ℓ、野菜500ベクレル/ℓとはるかに緩い。10月27日に内閣府の食品安全委員会は、食品から受ける被曝で放射線による健康への影響が見いだされるのは「一人当たり生涯の累積線量でおよそ100ミリシーベルト以上が目安」との最終結果をとりまとめ厚生労働省に答申した。これは内部被曝と外部被曝の影響を同じ様に見なしている非常に問題となる見解だ。平成24年4月から新しい基準値が適用され、食品による内部被曝の許容を年間1ミリシーベルトへ引き下げようだが（おそらく苦情が殺到したのだろう）、それでも子供達にはまだまだ高い。日本はチェルノブイリほど自給自足をしていくわけではないが、決して安全な状態ではないのだ。増して海洋汚染が深刻であり、魚の放射線測定は大幅に遅れているのが現状だ。魚は個体によって線量が違うだろうし、市場に出回るもの一匹一匹全てを測ることなど出来るわけもない。食物連鎖による濃縮も懸念されている。

チェルノブイリと比較すると、今の日本政府が用いている基準値がいかに高いか理解できよう。旧ソ連の方が日本よりも厳しい基準を設けたが、それでも多くの健康被害がでていたのである。日本は子供達にさえも年間20

ミリシーベルトという基準値を強いているが、それはチェルノブイリ事故で強制避難が定められた数値の四倍にあたる。チェルノブイリの高濃度汚染地域で住民が強制避難させられて廃村となった村々よりもはるかに高い線量の場所で、福島の子供達は普通に学校に通い、生活しているのだ。事故から25年経った今、ここは大丈夫だろうと言われてきた線量の低い場所でさえも健康被害が増大しているというのに。

国や御用学者は、「大丈夫ですよ。健康に被害はありませんよ」などと言い、挙げ句の果てには「安心を言っているのであって安全を言っているのではない。将来のことは責任は持てない」と言う始末だ。そう言った人物を放射線管理アドバイザーにし、要職につけて県民の被曝の管理をさせている。ガラスバッチの小型線量計を首からぶら下げられることは、「人体実験みたいだ。モルモットだな」と思われている。このままでは恐れている健康被害が本当に発生し、それも御用学者達によって隠蔽されて行く可能性が高い。国に任せていたら子供達を守ることはできない。国は住民に居住させながら除染するという方策をとっている。せめて除染が完了するまでは線量の高い地区の子供達や妊婦だけでも避難させるべきである。

私の自坊も除染の対象になる放射線量だ。チェルノブイリでは『暫時住民避難が必要な区域』に当たる。一刻も早く除染してほしいと思うが、果たしてどれくらい線量が下がるのか心配である。このような地域が東日本には沢山あるのだ。

今回の福島の事故では、セシウム137とセシウム134が1対1ぐらいで飛んだ。137の半減期は約30年だが、134の半減期は約2年だ。そう言う意味では5年後には除染も進めば今の線量よりは下がっているかもしれない。だが、恐ろしいのは内部被曝だ。内部被曝が防げない限り決して安心はできない。私達はチェルノブイリの現状から多くのことを学び、事実を直視し、政府の方針に対応して行く必要があると思う。

福島県議会で廃炉の決定

福島県議会は10月20日の本会議で、県内にある原子炉計10基全ての廃炉を求める請願を賛成多数で採決した。採決を受けて佐藤雄平知事は「採決の意義は本当に重い。第1、第2原発の再稼働はあり得ない」と述べた。また知事は11月30日に県内の原発全基を廃炉にするよう国と東電に求めることを表明した。12月28日には福島県は県庁で幹部会議を開き、大震災と原発事故からの復旧復興に向け「原子力に依存しない社会づくり」を基本理念に、県内の原発10基の廃炉を国、東電に求めることを盛り込んだ復興計画書を正式決定した。

ここにきて、ようやく県が原発を止める決定をした。遅い決定と言えば遅い決定だったろう。佐藤雄平知事は、福島に原発を持ってきた民主党渡部恒三議員の甥で、その秘書をしていた。プルサーマルを引き受けるなど、前知事の佐藤栄佐久氏とは対照的に原発推進派であった。国や東電に騙されたと発言しているが、事故後間もない頃はまだ原発に未練があるようだった。「知事は未だに東電とツルんでいる」などのゴシップが福島県内では絶えないが、とりあえず県内での原発の稼働は無くなったようだ。今後の動向を見守りたい。

低線量内部被曝の脅威

チェルノブイリの本を読んでいて、疑問が湧いてきた。線量の低い所で多くの健康被害が出ているという。先天性障害児の発生も線量の低い場所の方が多いらしい。なぜだろうか？線量が高い程被害が大きいのではないのか？

この疑問に答えてくれたのが、肥田俊太郎先生の『内部被曝の脅威』という本だった。この本は福島事故の

数年前に上梓されていたが、放射線被曝の実体について簡単に分かりやすく書かれている。この本によれば、被曝は外部被曝よりも内部被曝の方が非常に恐ろしく、また、内部被曝でも高線量よりも低線量の方が影響が大きいのだという。そういう実験結果がカナダ原子力公社研究所の医学・生物・物理学主任のアブラム・ペトカウ博士により出されていたが、原子力推進の圧力で研究所を閉鎖させられてしまった。だが、その学説が科学的な根拠となつて、広島島の爆心地から2 km以外で放射性物質のちりや雨により被曝した入市被曝者も、2008年に大阪地裁での原爆症認定裁判で勝利し、ようやく被曝者として認定されたのだそうだ。

私はこの本を読んで大きな衝撃を受けた。核開発や原子力産業はその陰に、様々な隠蔽、データの改竄、欺瞞があつて推進されてきたことを知った。特に低線量の被曝の影響は常に隠蔽されてきた。そうしないと原子力を推進できないのである。国際的な基準値でさえその影響を受けて定められており、外部被曝と内部被曝を同等に扱つて内部被曝の被害を正當に評価していない。人口放射線は自然放射線と違い、体内の特定器官に集中し濃縮される性質を持ち、細胞を破壊して病気を引き起こし、遺伝的障害を与える。実は世界中でこの低線量被曝の被害が出ており、それに苦しんでいる人達が沢山いるという。

これが事実だとすると、大変なことになる。下手をしたら福島どころか、関東・東北一円が危ない。特に、内部被曝に関しては、国の定めた食品に関する暫定基準値は殊の外高い。このまま市場に出回っているものを普通に食べていたら、かなり被曝するだろう。国は外部被曝と内部被曝の影響を一緒に見做して基準値を決めている。低線量内部被曝の影響はすぐには出ない。5年・10年あるいは20年・30年経つて徐々に生命を蝕んで行く。そして大人達より乳幼児や子供達に大きく影響がでるのだ。内部被曝によつて免疫力が著しく低下し、その人の弱い所に症状が出易く様々な病気を引き起こすことになる。チェルノブイリでは一時期「チェルノブイリ・エイズ」

などと言われ、今では「病気の花束」と言われている。あるいは「ぶらぶら病」といって倦怠感や無気力感によって日常生活を寝て過ごすようになる原因不明の病気が発症する恐れもある。これらは決して科学的や医学的に放射線の影響だとは証明ができない。それをよい事に国や御用学者は、年間20ミリシーベルトなどという、とんでもない数字を暫定基準値として福島県民に（子供達や妊婦にさえも）許容させている。そして実際に健康被害が起こっても隠蔽される可能性があるのだ。

ちなみに汚染された食品は日本中に流通されてしまう。福島の食物がヤミで出回り、2〜3年後には日本国中が汚染された食品を食べることになると言われている。福島県沖で獲れた魚は、関西あるいは九州で既に売られているという。福島産の食物ばかりではない。県外でも線量の高い場所は沢山ある。

いわきの知人の話によれば、子供が心配なので九州の米を取り寄せていわきの米と一緒に放射線量を測りに行ったが（いわきでも数カ所で測定できる様になってきた）、なんと九州の米の方が線量が高かったという。また、安全だと思っていた外国産のミネラルウォーターもいわき市の水道よりも高かったそうだ。震災の1〜2年前にフランスに輸出された静岡県産の茶葉から放射性物質が検出されたというニュースもあった。実は世界中の原発は安全に稼働しているも放射性物質を出している。皆知らない内に被曝させられているのである。実際に原発周辺での発癌率やその死亡率は高いというデータがある。

これが今の日本の現状である。被曝の影響は個人差があるが、すでに東日本をはじめ、関西でも症状が出ている。しかし、内部被曝を防げば、健康被害が避けられる可能性も高い。より免疫力が上がる食事や生活を行うことによっても防げるという。このことが、今後の被曝による健康被害を未然に防ぐための重要なポイントになるだろう。

11月2日 再臨界の可能性

東京電力は11月2日、1Fの2号機で原子炉格納容器内の気体から放射性キセノンが検出された可能性が判明、核分裂が起きている恐れが否定できないとして、核分裂を抑制するホウ酸水を原子炉に注入したと発表した。

再臨界の可能性があると世間を慌てさせた。10月にも1号機配管内に高濃度水素が溜まっていて、あわや爆発寸前のところだった。同じ10月には埼玉県でヨウ素が検出されている。ヨウ素が出たということは、それと近い時期に核分裂が起きていたということである。

そもそも放射性核種の測定は2号機でしか行われていないらしい。他の原子炉の状態は分からないのだ。今後再び放射性物質の大量放出がはじまる可能性は未だに否定できない状況である。

ダライ・ラマ14世の会見

ダライ・ラマ14世法王は来日して被災地を訪問し被災者を慰安された。その後、11月7日に東京で自由報道協会の記者会見が行われたが、法王は原子力エネルギーの推進には必ずしも反対ではないとの考えを示された。

原子力エネルギーの平和目的での利用は支持するとし、原子力以上に効率的な代替エネルギー源は今はなく、原子力エネルギーは途上国における社会経済的格差を縮小する手段の1つになるとして、「多くの発展途上の国々では依然貧富の差が格段にある。数百万人が依然貧困状態で暮らしており、われわれはそうした人たちのことを考えなければならぬ」と語った。さらに、風力や太陽などの代替エネルギーでは、急速に発展する国々の需要を満たすには現実的にみて不十分だとした。「一面だけを見て判断するのは正しくない」と述べ、物事の「全体」を

見るよう促した。また、原子力エネルギーの専門家は安全に万全を期すべきだとしたが、「どれだけ備えを万全にしても、危険を完全に取り除くことはできない。自動車に乗っていようが、食事をしていようが常にリスクはつきものだ。たとえ記者会見場であつても1%の危険は依然存在する」と何事にもリスクは付き物で原発ばかりが危険なのではないとした。だが、原子力を利用するかどうかを最終的に決めるのは民意だとし、「最終的に国民が（原発を）廃止したいと言うのなら、その判断に任せるべきだ」と述べられた。

これは信仰の問題もあるだろうから、あまり多くを語りたくはないが、率直な感想を言わせていただきたい。いろいろとお立場やお考えがあつての御発言だとは思、うが、法王は原発の実体についてきちんと認識されているのだろうか？特に低線量被曝の影響が隠蔽されて原子力が推進されてきたという実体について。私にはとても原発が発展途上国のためになるとは考えられない。昔、日本も途上国だった。だが、原発を入れなければ、もつと良い発展の仕方をした可能性の方が高いと思う。今、原発事故で日本がガタガタになっている。この先何年も続くだろう。国内でもう一度同規模の事故が起きれば日本は潰れるのではないか。これがもし途上国で起これば、ソ連が崩壊したようにその国は潰れ、人民の健康被害だけが残り、貧富の差どころではない最悪の事態になるだろう。また、使用済み燃料などの核廃棄物はどうするのだろうか。日本が管理しきれないものを途上国が管理しきれぬのか、甚だ疑問である。何事にもリスクは付き物だと言われるが、核エネルギーのリスクは世界中の生物が死滅しかねないリスクだ。私はそのような大きなリスクのある「効率的なエネルギー」よりも「生命」を重視する立場をとるべきであると思う。全体的に物事をみるということには大賛成だ。だが、それが人類だけの全体であつてよいのだろうか。この地球は人類だけのものではない。自然の環境や生態系を大きく損なうことは、地球全体のバランスを崩し人間も大きなしっぺ返しを喰らう。遺伝的障害の発生にいたっては仏に仇なす行為では

ないのか。私的な観点から言えば、真に全体性の利益を考えるならば原発や核兵器は首肯できないと思う。法王は核兵器廃絶を訴えてこられたが、原子力の平和利用は容認された。しかし、原発自体がその核開発の温床になり得る。核エネルギーは果たして人間に扱える代物なのだろうか。

地元の有志が作った震災の体験集

地元の有志が『H O P E 2』という震災の体験集を作った。売り上げは、経費を除いて全て義援金にするという。私にも原稿の依頼があったので、喜んで寄稿した。老若男女様々な立場の方々130人が寄せた本当に貴重な体験集になった。この様に地元でも頑張つて復興に尽くす動きが多くある。被災地は失ったものばかりではない。人と人との繋がり、ボランティアや御支援で受けた温情、絶望的な状態を経験したからこそ本当に大事なことに気付くことができた人が多かったと思う。そんなことを感じさせてくれる体験集に仕上がった。

ここでその体験集の中から一話だけ、九州に避難された主婦の方の話を転載させていただく。この話の中から、様々な『ふくしまの風景』が見えてくると思うからである。

私は今、佐賀県の鳥栖市という所に小六の息子、小二の娘と三人で住んでいます。親戚も知り合いもいませんが、佐賀県主催の「佐賀きずなプロジェクト」の支援のおかげで、とうとう佐賀までやって来てしまいました。人生で一度も訪れたことのない九州。改めて地図帳を広げ、場所を確認するところから始めました。思い返せば、不安を感じながらの福島での生活。食材選びなど、何かと窮屈に感じてはいたものの、考えあぐねてはまた同じ朝を迎える、という繰り返しでした。類に違わず、我が家も悩みはありました。介護が必要な年老いた母、家のローン、自営のお店、小学校卒業を目前とした息子の転校。枚挙にいとまがありません

ん。

しかし、ある大学教授が講演会で「子供を大人の犠牲にしてはならない。大人が子供の犠牲になれ」と話されていたのを聞き、とても感銘を受けました。「できるかできないかの問題ではなく、やるかやらないかの問題」だと気づかされました。ですが、家族がバラバラになり、慣れ親しんだ故郷を離れ、仲間にも会えない。今は何が正しいのか、正直わかりません。でも後悔はしたくない。

まだいわきにいた頃、外遊びをしたがる娘を、「時間を守る、砂遊びをしない」と約束して送り出しました。約束の時間を過ぎても帰らず、慌てて公園へ向かいました。すると、砂遊びをしているのです。「汚れた砂をとれば、前のように遊べるから掃除してるの。マスクもしてるから大丈夫だよ」とスコップを片手にニコリ笑う娘の姿に、思わず涙が溢れました。制限なく日が暮れるまで、また外遊びがしたかったのでしょう。ニュースや大人の話を聞き、子供なりにできることを考えたのだろうと思います。

今は、九州に来られたのも被災したからこそと前向きに考えています。何事も「よかよか」と受け入れてくれる温かさに包まれながら『普通』のありがたさを痛感する毎日です。公園からは子供たちのはしゃぐ声が聞こえ、虫捕りに精を出す姿をながめる。娘が摘んできた花を「きれいね」と言って生ける。自然と戯れて初めて人間なんだとしみじみ感じています。

東京での除染の話

11月21日、仕事で東京中央区の勝鬃橋へ行った。私が福島県民ということで、お施主さんと放射能汚染の話になった。お施主さんは銀座に勤めているが、銀座の泰明小学校も線量が高く、除染を行ったのだと言う。日比谷

公園も高いらしい。都内あちこちがそういう状態ではないかと話をされていた。下手をしたら、いわきより線量が高いところがあるだろう。放射性物質は、北は岩手から南は中国地方まで全国に降り注いでいるようだ（果たして1Fから放出されたものばかりなのかどうかは疑問だが）。決して油断できない状況である。

12月2日 東電の事故中間報告

東京電力は12月2日、自ら行っていた1Fの事故調査の中間報告を公表した。自己弁護としか受け取れない内容で、事故の発生は「想定外」の津波によるものだったとの言い訳に終始している。補償の問題や企業の生き残りが掛かっているので、東電としては当然な報告かもしれない。だが、経産省などの原子力ムラを含め彼らの行ってきたことは人類史に残る汚点だと思う。誠実な反省と対応が無ければ必ず同じことが起こる。しかし、それが全く見えない。これはある意味、戦争よりも質が悪く、自国を滅ぼす可能性を多分に秘めているのではないだろうか。

野呂美加さんの講演会

12月8日、チエルノブイリの子供達に支援活動を行ってきた野呂美加さんの講演会に参加した。そこでは貴重な情報を得ることができた。やはりチエルノブイリでの健康被害は私達の想像を超えているようだ。今現在、チエルノブイリでも起こった被曝の症状が、福島どころか、関東、関西まで出ているという。鼻血・下痢・喉痛・皮膚炎・倦怠感・抜け毛・白血球の減少・蕁麻疹・アトピーなどのアレルギーの悪化・免疫力の低下により風邪などが治りにくいなどである。チエルノブイリでは子供だけでなく大人達にも同じ症状が多く出ているという。

私も、事故後すぐは鼻血・下痢・軽い抜け毛があり、12月頃からは蕁麻疹に悩まされている。動悸・心臓痛・倦怠感も疲れやストレスによるものかと思っていたが、放射線の影響である可能性もあるようだ（セシウムが溜まると心臓痛がおけるといわれる）。妻は頭痛・皮膚炎・倦怠感・抜け毛、子供達も鼻血・下痢・咳（一ヶ月ぐらい）・抜け毛・口内炎・目の痛み・手足のしびれや痛み・倦怠感などがあった。秋頃から妻が食事によって免疫力を上げる工夫をし始めているが、子供の皮膚炎、妻の頭痛、私の蕁麻疹は収まっていない。かかり付けの医者も被曝するとアレルギーが酷くなると言っていた。放射線の影響は個人差があるが、割合早くに避難させていた妻子にまで軽い症状が出ていた。これらは事故前には見られなかった。いわきでもアトピーが悪化している人が多い。また、ダウン症児の出生が以前より増えているような話も聞く。関東では流産も増えているという。全部が全部、被曝の影響とは限らないが、否定もまたできないだろう。

また、チェルノブイリの子供達には、この他に貧血や目まい・視力の低下・繰り返す中耳炎・喘息・胸部痛・心臓痛・胃潰瘍・食欲不振・甲状腺のトラブル・腎臓病・リンパ節の腫れ・肺炎・関節痛・集中力が無い・疲れやすい・背が伸びないなどの症状が多く出ているという。薬も効かず、病院に行っても原因は分からない。健康な子供はほとんどいない。癌などの重篤な病気ではなく、軽い症状ではあるが健康でない人達がほとんどなのだという。また、突然死も放射能の影響でよく起こるのだそうだ。そして甲状腺癌・白血病・心臓に穴が空くという心臓疾患や水頭症等の障害児の出生などの重篤な症状がある。

野呂さんはさらに、「チェルノブイリで起こった症状と、今日本で起こっている症状が非常によく似ている。今、チェルノブイリでは1マイクロシーベルト/時で人の住んでいる所はない。0.5マイクロシーベルト/時で廃村。0.095マイクロシーベルト/時から汚染地域に指定される」と言われた（前述の通り事故から5年後に定

められた)。これを福島市の現在の汚染状況に当てはめれば、1Fから北西方向の福島市までの高線量汚染地帯と、福島市から南に郡山市くらいまでの中通り地方が、本来人の住める様な線量ではないということになってしまう。これは日本のどの研究者も言っていることらしい(御用学者以外は)。

御用学者はもともと高い線量でなければ鼻血は出ないと言っているが、私も家族も実際に出たし、野呂さんに言わせれば0・1マイクローシーベルト/時もあれば、それは当たり前に出るということだった。鼻に放射性物質が入れば、それが細胞膜を破壊し簡単に鼻血が出るのだという。鼻血と下痢の2点の症状が揃えば、間違いない内部被曝だと肥田俊太郎先生もおっしゃっているということだった。問題はそういう状態や環境に長く居ることと、段々と重篤な病気になってしまうのだという。自分や家族に出た症状から判断して、御用学者と野呂さんや肥田先生の話のどちらを信じるかは言うまでもないだろう。よく、放射能を怖がっているストレスのほう放射線による影響よりも被害が大きいという人がいるが、小さな子供が放射線のことを知っていてストレスを溜めるのだろうか。そういった知識のない子供達こそが一番放射線の影響を受け、重篤な病気になっている。あるいは、動物は放射線による影響を知らないが、なぜ動物達にも大きく被害が出るのか。

「今、私達がやらなければいけないことは子供達を守ることと、神経質になり過ぎてよい。後で『そんなやり過ぎだったよ』と言われてもよいと思う」と最後に野呂さんは語った。全く同感である。

WHOと原子力推進のIAEAとは協定を結んでいてチェルノブイリの健康被害を正確に発表していない。しかし、甲状腺癌や白血病はIAEAでも認めざるを得なくなるぐらい増加した。実は彼らの発表以外の多くの病気が発症していて、多くの人達が死んで行ったという現実がある。

今回の福島の事故は、世界ではじめて東京のような大都市圏が放射能汚染を受けた。核実験時代にも同じよう

に放射性物質が降ったという人がいるが、3月21日に降った量だけでもその10倍の量が首都圏に降り注いでいる。今後、福島はもとより、関東や関西でも健康被害を注意深く観察して行く必要がある。

『低線量被ばくのリスク管理に関するワーキンググループ』について

11月9日から、国は低線量被曝の影響についてまとめ、12月上旬までに公表すると発表した。この『低線量被ばくのリスク管理に関するワーキンググループ』は、低線量被曝でも影響があると言っている学者も交え、あらゆる角度から検討するということだった。ところが、影響があると言っていて呼ばれた学者は一、二人だった。その代表は国会で「放射線の健康への影響」について参考人としてスピーチをした児玉龍彦先生だった。この模様はインターネットテレビで見ることが出来る。児玉先生は第4回会合に呼ばれ、国や御用学者に対して怒りをこめて発言された。だが、御用学者達に寄ってたかつてたかって虐められる。そもそも論点が違うので、話がかみ合っていないのだが。挙げ句の果てには何故か児玉先生の発表概要だけが無い。これは審議会などでよくあるケースで、反対派を少し入れておいて公平に見せかけるが、結局はもともと談合してあって押し切るといふ。結果、政府が12月22日にとりまとめた報告書では、年間20ミリシーベルトという避難指示の基準を肯定し、他の発癌要因（喫煙・肥満・野菜不足・受動喫煙など）によるリスクと比べて十分に低く除染や食品の安全管理などでリスクを回避できる水準であるとし、今後より一層の線量低減を目指すにあたってのスタートラインとしては適切であるとしたのである。また、子供や妊婦に対しては、「成人と同様100ミリシーベルト以下の低線量被曝では他の要因による発癌の影響にかくれてしまうほど小さいが、高い被曝線量では思春期までの子供は、成人よりも放射線による発癌感受性が高いことから、子供に対して優先的に放射線防護のための措置をとることは適切である」とし

た。この検討結果がどういう意味を持つかご理解いただけるだろうか。これは国が福島の子供達を見捨てたのと等しい。癌になることだけが健康被害ではない。放射線の影響で免疫力が低下し、様々な病気を誘発するのだ。私はこれを見て怒りを通り越して非常に冷静になってしまった。これがこの国のやり方なのか。当たり前といえども当たり前かもしれない。まともに避難させれば、補償や経済活動の被害の増大で国や福島県が減じることになりかねない。除染やIFの廃炉でさえ莫大な金額が掛かるのだ。低線量被曝を認めれば、今後原発を稼働していくことも困難になるだろう。その影響は晩発性で因果関係を決して証明することはできないし、データを隠蔽や改竄すれば国民に気付かれないかもしれない。そのために御用学者を要職に就けているのだろう。

だがしかし、そんなにうまくは行かないと思う。今はインターネットがあり、簡易放射線測定器も持っている人が多い。情報を隠蔽・操作することも難しくなるはずだ。きつと心ある医者や研究者が暴いて行くに違いない。その時、国や御用学者は一体何と言いつけるのだろうか。

いずれにせよ、被害を未然に防ぐための早急な対策が必要である。重篤な被害が出てからでは遅いのだ。

命懸けのジャーナリスト

この低線量放射線被曝の問題は、常にその政策や産業を推進しようとする勢力に隠蔽されてきた。しかし、事故や劣化ウラン弾などで放射性物質が飛び散った所は、必ずと言ってよいほど健康被害が出ている。チェルノブイリでもそうだった。ソ連当局も、IAEAなどの原子力推進勢力もこれをもみ消そうとしていたが、結果的にはある程度はそれに成功したが、隠せなかったことも多い。それは、原子力推進に靡かなかった学者や医者や研究者、そして命を懸けて現地に入り、事実を伝えたジャーナリストによるところが大きい。私はその一人である

広河隆一氏の本を数冊読んだ。広河氏は1Fの事故後もすぐに福島に飛び、原発の近くまで調査に行っている。12月1日に行われた自由報道協会による記者会見では、福島で起こっていること、チェルノブイリで起こったことを分かりやすく説明されている。You Tubeで見ることができると是非ご覧になってほしい。チェルノブイリの事故後、被害報告がいかにして改竄・隠蔽されていったかを知ることが出来る。

だが、日本よりまだ旧ソ連の方がまじだった。事故当初、ソ連は日本と同じく情報を流さず隠したが、その後は軍が動いて人々を守る為に避難させている。日本は原発産業を守る為に被害を隠さなければいけないという考え方で、徹底して「安全だ、健康への被害は無い」と言い張って避難を渋り、現に年間20ミリシーベルトというとんでもない数値を子供達や妊婦にも許容させている。1Fへ取材に行ったジャーナリストは皆、「一般に流されている情報と事故の真相は桁が違う。何でこんなことが起こっているのに、皆普通に30kmや40km圏で子供達が生活しているのだ。自分がおかしくなってしまったのか」と異口同音に言うという。

また、NHKは意外と良い番組を放映している。プロデューサーの暴露本によると、かなり上から圧力が掛かったらしいが、人道的な正しい報道をすべきだと押し通したという。特に『ネットワークでつくる放射能汚染地図』、『低線量被ばく 揺れる国際基準』が衝撃的だった。インターネットでもまだ見ることが出来る。見れば国や御用学者に懐疑的になると思う。

この様に、命懸けで事実を伝えようとしているジャーナリストの方が信頼できる情報を提供していると思わざるを得ない。しかし、正義感に燃えて、真実を報道しようとするジャーナリストやTV番組制作者ほど片隅に追いやられるという現実がある。

ヨウ素剤の再配布 揺れる収束宣言

1月6日、自坊にいわき市から郵送でヨウ素剤が届いた。いわき市では、事故後すでに市役所で40歳未満の市民にヨウ素剤を配布していたが、今回はその消費期限が過ぎることと、未だ原発事故が収束していないという理由で再配布すると手紙には書かれていた。野田首相は12月16日に、1Fの1〜3号機の原子炉が冷温停止状態、事故収束に向けた工程表のステップ2を達成し、廃炉へ向かうと発表した。これは事故収束宣言と受け取られたが、いわきでは誰もそんなことを信じてはいない。いわきは原発修復の拠点となっているため、事実に近い情報が入ってくるのだ。東電の社員自身が「国の言うことなんか信じちゃだめだよ。手が付けられる状態じゃないんだから」と言っている。市がヨウ素剤をわざわざお金をかけて郵送で送ってきて収束していないということとは、未だ再臨界や放射性物質の大量放出の危険性があるということなのだ。東北電力に勤めていた檀家さんの話では、チャイナ・シンドロームが起こる可能性も高いという情報が入ったそうだ。チャイナ・シンドロームとは、燃料が高温でコンクリートを突き破り地面に達し、地面を溶かして地下深くまで落ちて行ってしまうことで、地球の裏側まで達するなどとも言われているが、おそらく地下水に冷却されるか何かで途中で止まるだろうと考えられている。しかし、そうなれば地下水の汚染は半永久的に止まず、それが海に流れて海洋もそのように汚染され続ける。その可能性は否定できない。

その後、配管の凍結や2号機の温度上昇が報じられた。特に使用済み核燃料プールがある4号機は本当に危ない状態だとよく耳にする。未だ放射性物質も出ている。全く収束はしていない。所詮、原発や核エネルギーは人間の手には負えないのだと思う。

地球温暖化説・再生可能エネルギーへの疑問

日本は資源の少ない国であるから原発は必要だ。原発無しでは電気が不足する。あるいは代替エネルギーにシフトして行くまでは必要だという意見が多い。だが、逆の意見を述べる研究者もまた多い。ここでは詳しくは述べないが、結論的にいうと、原発無しでも日本の電力は足りている。ただ、停止している火力発電を稼働させるため、CO₂の排出量が増えて地球温暖化に繋がるというのが電力会社や政府の言い分である。ところが、この地球温暖化説に異論を唱える学者が増えてきている。確かに地球は産業革命以降、温暖化しつつあるようだが、CO₂だけが原因ではないし、それが決められた経緯も怪しく、根拠に乏しいようだ。まだ不確かなことゆえ、ハッキリとは言えないが、それすらも原子力推進のプロパガンダの為に考えたされた可能性が高いということだ。たとえ温暖化してもアルキメデスの原理により北極の氷が全て溶けても海面は上昇しないし、南極は氷が溶けても、却って水蒸気になり氷の厚みは増すという。また、CO₂犯人説が本当だとしても、現在の火力発電所を天然ガスを使うコンバインドサイクル発電にすれば、CO₂も大きく削減され、電力も十分賄え、電気代も上がらずに済むらしい。いずれにせよ、最悪の放射能汚染をもたらす原発がクリーンだということ自体がおかしい。たとえ温暖化になるうが、放射能汚染よりは100倍ました。温暖化ではそこまで生命や土地が犠牲になることはないだろう。真偽の程は定かではないが、この内容は今後注意を向けて行く必要がある。

また、再生可能エネルギーも様々な問題が指摘されている。安易に政策として税金を投入して行けば、そこに利権が絡んで原発と同じようになりかねないとの意見もある。ここは慎重になって、原発とともに次世代のエネルギーの問題も国民全体で思案する必要があると思う。

1月5日 福島市を視察

1月5日、お世話になってる宮城県白石市のお寺にお手伝いに行った帰りに、福島市の様子を見て帰った。福島市はいわき市に比べて大分線量が高い。皆どのように生活しているのか気になっていたが、見た感じは以前と何も変わらない日常生活を送っているようだ。学生も小さい子供も普通に歩いている。汚染が心配な人は、もう避難してしまっているのかもしれない。事故から約10ヶ月経つが、不安を抱きながら、恐怖と闘いながら、日常の生活を普通に送っているのだと思う。非日常が日常になってしまったのだ。小さい子供を持つ親は特にそうだろう。いわき市もそうだが、街は沿岸部以外はもう普通に動いている。人も普段と同じ様に活動している。この問題に対しては個人差があつて、全く気にしない人も居るかもしれないが、ほとんどの人は今後の福島や家族の健康のことを心配しているだろう。

2歳ぐらいの女の子が、笑顔で飛び跳ねて遊んでいるのを見かけた。あの子達の将来が、無事であることを心から願わずにはいられなかった。

薄磯修徳院の復活

1月21日、前述した薄磯の修徳院で、恒例行事の大般若会が行われた。私も、修徳院がこれ程速く復活し、まさか例年通り大般若会をやるとは思わなかった。ビックリした。凄いいことだと思う。新しく住職になられた猪狩弘栄住職や檀家さんの熱意を感じる。喜んで御助法に伺った。仮設住宅などに居を移した方々が多く駆けつけ、皆、御本尊に真剣に祈っていた。以前はお寺からは密集した民家しか見えなかったが、今ではすっかり山のような

瓦礫も片付けられ、海まで見渡せるようになった。先代住職のことを思い出すと悲しみが込み上げてくるが、この寺院復活と大般若会に集う人々の顔付きを見て、地区再生の大きな希望を感じた。

希望の灯り

福島第一教区の青年会は、2月5日から3月3日まで、約1ヶ月かけて神戸から『希望の灯り』を運ぶ。神戸では阪神淡路大震災の5年後、NPO法人が中心になって全国から聖地などの火を持ち寄り、被災地の復興と死者の鎮魂を願った。その火をいただき、様々な御支援のもと、いわきまで徒歩練行で運ぶのだ。3月10日にはその『希望の灯り』で御逮夜法要が、3月11日は教区で一周忌法要が執り行われる。「被災地での祈りの対象にするため、日々薄れゆく被災地への気持ちを再び思い出してもらうため、今後長く続くであろう支援活動への決意を盤石とせんがため、今まで御支援を頂いた方々へ感謝の気持ちを表すために『希望の灯り』を運びます。全国の方々の祈りの気持ちを灯りに込めてもらいたいです」と久野会長は語る。

心ある医師・研究者の恩恵

今私達が、現前の事実として存在する原子力推進の深い闇について、あるいはそれによって隠蔽されてきた真相や身体的影響について少なからず知ることができるのは、それを問題視し、己の人生を捧げて解決に取り組んできた心ある研究者や医師の方々のおかげだ。彼らは、反原子力を訴えるがゆえに反体制と見なされ、常に片隅に追いやられ、その世界で軽蔑や冷遇を受けてきた。それでも、その闇に負けずに光を放ち続けた。彼らの成果があつて、今までも多くの人達が救われてきたし、今回の事故によって私をはじめ多くの人達が事実を知ること

や理解することができたのだ。その恩恵は計り知れないと思う。深謝せずには居れない。

むすび — 原子力産業・核開発に潜む無明 —

至極、分際を超えたことではあるが、この原発事故を通して感じることを福島県の僧侶として率直に述べるべき必要性和その衝動を覚えるので、結びとして開陳させていただくことを御寛恕願いたい。

1Fの事故があつた後でも原発は必要だと考えている人は多い。そして日本も核兵器を持った方がよいと考えている人も、隣国の脅威からか意外に多い。政治家にもいるし、日本政府が採算度外視で国策として原子力政策に莫大な税金を投入してきたことにも、その影が見える。しかし、武力に武力で対抗すれば、恐怖が恐怖を生み、憎しみがまた憎しみを生む。「自らが憎しみを止めなければ、憎しみは永遠に止まない」とは仏法の智慧である。核兵器に対して核兵器で対峙すれば、抑止力よりもその脅威が永遠の分離（間隔）を生む。これは智慧からは最も遠いことだと思う。

また、原発は安全に稼働していても、トリチウム等の放射性物質を放出し、周辺の住民に被害を与える（160 km圏内での2倍の発癌増加が報告されている）。それが電力会社の杜撰な安全管理のもと、この地震国の日本に急所のように各地に置かれている。再処理工場のある六ヶ所村で何かあつたら世界は滅ぶとさえいわれている。もし、原発が本当に安全だと言うならば電気使用量の多い首都圏に作るべきだろう。送電のことを考えても、その方が理に適っている。

それに、原発にしろ核開発にしろ、その最終処分場が世界中のどこにも決まっていない核廃棄物を一体どうし

ようというのだろうか。ガラス固化体にして地下に十万年も保管するというその発想自体が愚かだと思う。誰が十万年もの間、その責任を取れるというのだろうか。後世に迷惑と災いを残すだけである。

今だけ、自分が生きている間だけ、自分が住んでいる所さえ安全であればよいという無責任さ。一部の人間が利益を得て被曝によって他の生命や環境が犠牲になってもよいという貪欲による差別。そして事故や被曝の影響を隠蔽し、情報や世論を操作して原子力政策や産業を続けようとする嘘と欺瞞が、そこには存在する。その為に、低線量の内部被曝等の影響は被曝を強いる側の人達によって常に隠蔽され、多くの人々がその犠牲になってきた。この核に纏わる放射能汚染の問題こそ、地球上の生物や植物、自然環境に悪影響をもたらす最大のものであり、分離性（無始の間隔・根本無明）の極まれるものではないのか。この、「自と他は違うという分離性」こそが、「自と他と仏との平等性を知らず差別を執する貪欲」こそが、お大師様の言われる「生生生生暗生始、死死死死冥死終」という、人間の持つ深い闇であろう。

自我を超えたところで観れば、原発や核兵器、放射性物質自体に善悪は無い。ただ、それに纏われれば必ず闇が生じる。そこには常に放射線被曝という生命を脅かす問題があり、加害者側が被曝の影響を隠し、あるいは過小評価する基準値をもって成り立っているがゆえに必ず『間隔』が生じるのである。今、半世紀以上に渡って培われた人類の最も深く暗い闇が、目の前にポツカリと口を開けて姿を現している。しかも、日本はもとより世界の生命が死滅しかねない危険性を含んでいる。私達はその中で生活しているのだ。それは決して大袈裟ではなく、今回の事故を通して様々な事実が浮き彫りになったことでも証明されたと思うし、世界中で未だに原発新設・増設の気運があることから想像できることだ。『無始の間隔』という闇が、規模が大きくなり過ぎてそこまで行ってしまうのである。核のエネルギーは、その強さや効率性の代償としてあまりにも大きくなりリスクを伴う。

今回の原発事故から見えてきたのは、この「無始の間隔が世界を滅ぼしかねない現実が存在する」という重大な問題である。これは、経済性と生命のどちらに重きを置くのかという、我々一人一人の姿勢にも十分関わってくることもある。経営としての利益を否定しているのではない。その過剰な利潤の追求によって深い闇が生まれ、多くの人（生物）のいのちや、自然環境を損なうこと、あるいはその可能性があることが問題なのだ。このいのちは、個々の生命でもあるし、大日世尊の命が流れているものでもある。我々は僧侶として、この「いのちを損なう分離性」という闇に率先して光を当てるべきではないだろうか…。

闇は攻撃しても払えない。返って闇に飲み込まれてしまう。光を当て、照らすしかない。闇に光を照らせば、闇はたちまち消える。闇がどこか別に移動した訳ではない。つまり、実は、闇は始めから存在しないのであり、それは『光の欠如』であって闇と言われる何かしらの実体が存在するわけではないのだ。本来、全てが大日如来であって、闇や光、善や悪という二元性は存在しない。全てが清らかで、大悲そのものである。しかし、世尊は敢えて二元化し、闇（分離性、無始の間隔・根本無明）に光を当てること（愛・大悲による合一・二元化）により自らが純粹な光（愛・大悲）そのものであることを知ることによって自受法楽されたまうと、私は自分の体験から認識している。私達自身も、それによって様々なことを学ぶのだ。それ故に闇を憎まず、光を照らすことが肝心であると考えている。加持力はそれによって顕われるし、無明のエネルギーは偉大なる光（明）のエネルギーに、「差別を執する貪欲」は「平等性を知る大欲」に変わるだろう。

人類と消せない火（核エネルギー）との共存は、幻想を抱かせるのみで、災いを招くだけだ。本当の復興とは、災いを取り除き福を興す『福興』であり、それは仏法の福德であるし、心身の健全な社会を実現することでもありと思う。福德とは差別（分離）の中に平等性を観ること、智慧とは平等性の中に差別（役割）を観ることとも

いえる。福德と智慧の無量の資糧を積集することは真言行者の修めるべきところである。この福德と智慧の根幹に横たわるものが根源的な大悲（愛）であり、『大日の光』であろう。すべてを慈しむ遍く大悲から観れば、いのちを損なう危険性の高い原発や核兵器という深い闇にこそ光を照らす必要があるだろう。これは六波羅蜜であり、五智であり、菩提心であり、三昧耶であると理解している。修法や祈りによってその行為を代替すると言っても、拝みや祈りだけで、はたまた学問や思想だけでこの大きな問題を解決できるだろうか。次のステップが望まれると思う。

この大災害を教訓に、日本が光ある方向に転換していかなければ、日本はもとより世界の未来は暗い。政府が原発を順次再稼働させて、ほとぼりが冷めれば新設・増設する可能性は多分にある。「40年以上の稼働はありえない」と言っていたことですら怪しくなってきた。海外にもドンドン輸出しようとしている。それほど、電力会社やプラントメーカー、経団連などの経済界の力は強い。アメリカや世界の原子力産業の圧力もあるだろう。原発がある自治体、誘致したい自治体も雇用や産業等の問題で原発を手放せないだろう。しかし、国民全員で真の利益とは何かを真剣に考え直さなくてはならないと思う。国民の心身の健康、『いのち』こそが、国の財産ではないのだろうか。一部分の利益の為に全体性の真の利益を損なってはならない。決して煽動するわけではないが、今はまさに、その瀬戸際であり、転換していく機会なのだと思う。日本で多くの原発を新設・増設しようとしているというタイミングをみても、世尊はそれを知らしているかのようだ。

我々がまずもって為すべきことは、仏を、法を信じることであり、人を、そして光ある未来を信じることであり、人々の悪意（闇）を恐れるより、善意（光）を信じよう。そしてそれを少しでも実現できるように努め、広めよう。光ある言葉を発して法を伝えよう。刮目して現実をありのままに受け入れ、そして、この国を愛し、

光ある国に変えて行こう。

日本が変われば、きつといつか世界も変わる。日本が変わるためには、国民、一人一人の意識が変わる以外にはない。国政を司る政治家を選んでるのは一般市民の私達なのだから、私達が変われば必ず日本は変わるはずだ。政策や世界を自分のこととして考え、無関心を無くして、一人一人がきちんと国に参加して意見をしよう。「あきらめ」ではなく、「希望」と「勇氣」こそが社会を変えて行くのだ。将来にそれが成し得るならば、今回の災害もただの犠牲には終わらないはずだ。

もし、私達の宗団が、現代の密教、伝統の創造ということを真剣に考え、社会にその意義を問うならば、この最大にして未曾有の社会・環境問題を決して避けて通ることはできない。真言僧が、率先してこの難問に立ち上がるべきであると思うことは智山ジャーナル第58号の拙稿で述べた。人々の心に光が灯り、光を互いに輝かし世を明るく照らすことができるならば、闇は晴れ、道理に迷う人は少なくなる。この様にこの重大な問題がよい方向へ向かい、解決されるほど人類の意識が向上する時が来るならば、他の諸問題も自然と解決に向かい、この世に密厳国土のような平和な世界が実現するだろう。それはお大師様の願いでもある。末徒の我々が、いつの時代でもその役割の一端を担っていることは言うまでもない。それがどれだけ困難なことであっても、それに努めることには尊い意義があるはずだ。

今後、福島をはじめ各地で多くの健康被害や遺伝的障害が予測される。しかし、決して因果関係は証明されず、政府はそれすらも隠蔽しようとするだろう。年間20ミリシーベルトを許容させようとしていることも、福島医大の副学長に山下教授を据えていることもその布石に見える。その陰で泣く子供達や母親の姿を見ることになれば、それは本当に辛いことだ。今はただ、あらゆる生命に及ぶその被害が最小限に食い止められ、日本や世界中の土

地や海が、これ以上汚染されないことを祈るばかりである。
光輝く未来を信じて、この手記をむすぶ。

摺筆

〈キーワード〉

原発事故 深い闇（無始の間隔） 大悲の光